

女鑑

明治二十八年八月二十四日發兌

第九十三號

東京國光社

女鑑第九拾二號目錄

女鑑

戰後婦人の任務に就て……一

論說

婦人の任務……宮地 嚴夫……六
女子教育一班(緒言)……三輪田眞佐子……一八

史談

妓王の事……鹽井 ふく子……二三
稲生春子傳……永石 蕭風……三〇

家政

いけ花(第三)……田邊 和氣子……三三
だいごころ……三五

學園

わが學園……鹽井 正男……三七

漫錄

高岡獨見は訪憎まる……故人小山田與清……四五
謠曲……故人小山田與清……四五
宮女の仕を教す……故人小山田與清……四八
目黒の瀧……永石 總文……四八
歌會私式……なにがし……五一
花ふゝき……鹽井 雨江……五七
可憐孃(三)中……中尾 蘂夢……六五

文林

歌……高崎 正風……六八
仝……諏訪 忠元……六八
仝……小出 粲……六八
仝……遠山 英一……六八
仝……坂 正臣……六八
仝……曲淵 貞恒……六八
仝……近衛 光子……六八
仝……島津 暢子……六八
仝……仝……六八
仝……稅所 敦子……六九
仝……諏訪 晴子……六九
仝……遠山 稻子……六九
仝……三輪 眞佐子……六九
仝……內田 ゆか子……六九
仝……松原 ゆき子……六九
仝……彦坂 尚子……六九
仝……仝……六九
納涼……三輪 義方……六九
扇……坂 正臣……七〇
親しき友にわかるゝときよめる……高田 昌蔭……七〇
むさいふことをなよめる歌……海上 誇子……七〇
文
暗夜すゞみに行……林 甕臣……七一

雜報

被害地御救恤金御下賜……七三
俘虜天恩に泣く……七三
造花の御注文……七四
女子職業學校の祝宴……七四
貴夫人の美擧……七四
軍人慰勞會募集金決算の報告……七四
細民救濟會……七五
凱旋兵士の祝宴……七五
女子高等師範學校補欠入學……七六
奇論(東京經濟雜誌所載)……七七
地理知らぬ旅人……七八
受賞者……七九
名譽の順良婦人の表彰者……七九
課題出詠の君たちに……八〇

敎の庭

鍋島侯爵夫人染筆色紙形……八〇
歌……百數十首
文……數章

附錄

讃岐の栞(小前)
修身百首(つゝき)

口繪……水谷 秀湖
挿畫……高橋 松亭

妓王



戰後婦人の任務に就て

なにごとにもあれ、世の大きなることとも、小さなることとによらず、婦人内助の力與りて功あることとは、古今に通じていと明らかなることにて、今更にいひ出づべくもあらず、さてその務むべき業も隨ひてさま〴〵多かるが中に、今まのあたり要とありぬべきことどもをつみ出でゝ、こゝに論はんとす、そも〳〵戰勝ちての後、國民の驕るは、いとも〳〵忌むべき限りにこそあれ、古今の史をひもときて、ありし世の狀を校ふれば、洋の西東によらず、國の何こにもかゝはらず、勝ちて驕れるは通弊にして、かゝる國々の、末終に滅びさ

るは稀なり、これを約むれは、一家も亦さるべく、一人もはた此理にはもれざるべし、
征清の役おこりてよりこのかた、夫の出陣したるは、其後の政ををさめ、さらぬは、恤兵に、看護に、かまかくに、身をくだき、心をつくしてしかは、其の功績、世にあらはれて、稱へぬもののなきはかりまなりぬるは、婦人の社會にとりても、うれしき限りまころ、されどもこゝに果てたりとはすべからず、かくて、勝て驕るといへることとは、敵と相むき立ちて、挑み合へる際にありてすらも、ともすれは、萌すものなるを、况して我軍の、戰へば勝ち、攻むれは取り、只勝ゝ勝ち、猛り奮ひて、凱旋すなれは、其の功を恃み、勳にほこりて、將驕り、卒怠る弊は、或は免かれじところ、思ひしか、

さるを凱旋の今になりては、いさゝかもさるけしきはみえず、上は將校よりはじめて、下は兵卒にいたるまで、謙遜にして驕矜の態だにもなし、さきに神戸市民、宴を張りて、歡迎せんとしつるを、大山、野津、の兩大將は、いなみていへらく身にさばかりの功なくて、いかでか觀迎を受けん、とて遂にやみにき、川上中將は、國憂いまだはれず、今豈歡宴の時ならんや、とて祝和の會を辭謝し、山地中將は、歸航の途に、厚く我部下にさとして、戰功にほこるまじきよしを敎へ、桂中將は、まだかへらぬさきに、人を我所管地にやりて、必ず犒勞の宴をまけて迎ふまじき意を傳へてき、かゝれば將士兵卒互に相敬愼して、犯かさず、驕矜負誇の行もなし、さるはおぼろけの業にはあらざるなり。

されども、今とみに心ゆるすべきにあらず、戰後風紀紊亂の弊は、凱旋の折に

のみにあらずして、其の後數ケ月をへて、さて發ることもあればなり、そも〳〵この弊の、まだ萠さゞるほどに、ふせぎとゞむるは、外にありては、將帥の躬行、率先謙抑遜讓の德と、各自の敬愼とにより、内にありては、婦人内助の補にあらずんばあらず、されば常にこゝに心を用ゐて、ことに貞淑婉和至誠藹然の心をもて、其の家政を修め整へて、さて良人遠征の艱苦を忘れしめんことこそ、肝要なれ。

こたびの大捷に、我皇國の光威は、万邦にかゞやきわたれり。もし風紀紊亂などの弊おこりたらんには、薪に伏し、膽を嘗めつる艱苦の功も、只水の泡と消え去りぬべきのみかは、かへりて國の光威をも失ふに至りぬべし。我皇國の軍人にして、さるあさましきわざは、あるまじきことなるべけれども、世の習ひ

としてともすれば、中正をはなれて、岐道に赴くことなきにしもあらず。軍人の精神は、各自の操守にありて、他人の扶掖に須つべきものにはあらざるべけれども、既に家庭あるからは、内助の補の、要あるべきこともなしとはいふべからず、遠き西洋はしらず、わがくにゝて、武夫の妻にして、戰にのぞみて、よく夫を助けて、戰功を完からしめつるものいにしへ今の史に、數多みられて、婦人といへども、事變に處しては、鋭意を振り起して、大事に堪へけるは我國古よりの風なるをや、さはとにもあれ、かくにもあれ、今にして論功頒賞の、榮典の、既に終りなん後までも、久しくこの皇國軍人の、謙抑の美德を保ち完からしめんは、一方には寔に婦人の、更に利心をふり起して、内助の實を擧ぐべき任務を果さであるべき時なるかは。

論説

婦人の任務

宮地嚴夫

婦人の任務は、甚だ重きものなり。故に時宜により、場合によりては、其功績に於ても、亦男子に加るもの無きにあらず。請ふ以下之を論ぜん。夫凡人生の事たる、如何なる豪傑と雖も、如何なる俊哲と雖も、其生れ出し最初に遡る時は、婦人の腹より生出したるにあらざるもの無く、而して婦人は只其形體を生出すのみならず、多くは其人の精神も亦其婦人の發育養成する所に係らざるは無し。何を以て之を云ふぞとならば、本邦にては、彼菅公又は小楠公の母君の如き、漢土にては、孔丘孟軻の母の如きを始め、其他泰西諸國は云ふを待ず、凡世界萬國の、然も古今の久敷間に於て、國家を益し、特功を建て、名譽を博し、

偉跡を後世に傳へし程の者は、十中七八は、其母の感化の宜しかりしに依ずんはあらず。婦人の任務重且大にして、其功績に於ても、亦偉且特なるものゝあらずや。是に於て今其一例を擧んに、方今宇内の各國の中に於て、自ら文明を以て許し、開化を以て誇る國々に於ては、孰れにしても、此婦人の任務を盡すもの最も多く、隨て其功績も亦著大なること、云ふまでも無きなり。中に就ても彼世界の海王と稱せられ、其版圖には日の沒すること無きとさへ、自ら誇ることを得るまでに至りたる。英國の如きは、婦人の任務を盡すの結果、此英國をして、英國たらしめたるに、最も與りて力あるものなりと謂へり。今其聞く所を述べんに彼國は元來、其本國に於ては、我帝國と、其面積伯仲なる、歐州の一島嶼國ゝ過ぎざれども、其嶋嶼國なるを以て、夙に海軍及び航路の擴張を計

らざるを得ざるを思維し、漸次に其目的を達して、遂に今日の強大を爲すに至れるものなり、而して其海軍を振起し、航路を擴張するに就ては、是非ともに貴賤となく、上下となく、男女と無く、老若となく、全國一般の者共總て海上に慣れて、波濤にも毫も畏懼するもの無く、自由自在に、船艦を乘廻すことを得る、氣風を養はざるべからず。是を以て、英國にては、之が爲に專ら誘掖薫陶を力め、遂に其意を得て、今日の姿とはなりたるものなり。而して英國が斯る形勢を造り出すに至りしものは。主として婦人の任務を全したるに由ることなるが、英國婦人は、抑如何にして斯る形勢を造り出したるかと云はんに、凡婦人に在りては、航海のことなどは、好まぬものなれども、英國婦人は、幼少の時より、時々自ら軍艦をも見に行き、諸種の船舶にも乘込み、已れ能く船艦

のことを心得居て、嫁して人妻となり、子女を産たる後は、其子女の幼稚の時より、常に乳房を含ませつゝも、能く之を云ひ聞せ、又時々其幼稚なる子女を連れて、船艦にも遊び、竟には夫妻相携へて、始終船中に世を渡る者さへ、多くあることゝなりしより、永き航海中には、自然に船中にて孕み、船中にて出産する者も往々ありて、船中にて生れ、船中にて成長するもの多くなるより、後には海上も陸地も更に差別無きまでに、心安く思へるもの往々出來りて、万里の航路も事ともせざるより、遂に今日を爲には至れるものなりと云ふ、斯て廣く世界に行き亘りて、諸外國にも交はるに就ては、唯航海術に巧みなるのみならず、又之と共に其本國を愛念する、我帝國にて云はゞ、彼大和魂とも稱すべき、所謂英國魂なるものをも、養成し置ざるべからず。如何となれば、若英國

人にして。英國魂なるもの無らしめば、外國に往て久しく其國に住むと共に、自然其國風に化せられ、遂に英國人たるの本性を失ふに至らば、其本國たる英國に於ては、毫も利する所無のみならず。或は却て大いなる害を受るかも知るべからず、是に於てや、英國にては、又自國の言語を擴張し、併せて自國の歴史を講明して、最も其尊嚴を裝ひ、以て其國家の基礎を鞏固ならしめたり、抑其自國の言語の重んずべく、之が擴張を計るべき所以のものは、他なし、凡言語なるものは、人々互ひの意志を相通ずる道具にして、人にして若言語相通ぜざらしめば、何を以てか、其感情を惹くべき、要するに、誘導感化を行ふに道無きなり。是英國は云ふを待ず、歐米各國人が、佛なり、獨なり、魯なり、伊なり、澳なり、各自國の言語を主張して止まざる所以にして、其中英國を以て最なりとす。

是れ英國が其版圖を廣めたるに於て、特に力ありし所とす。斯の如くにして、英國が其領土を廣むるに隨ひ、我版圖に歸したるものを、同化するには、種々の手段を用ゐし中にも、宗教と學說とにより、先自國の言語を敎へて、其感情を惹くの道具に供し、以て其感化を導きたるもの、最も多きに居ることにて、之が衝に當りしものは多く女敎師にして、是亦婦人の任務としたる所なり。此外英國が自國の國力を膨脹せしむる爲に、最も力めたるものは、英國魂の養成にして、是亦其大部分は、婦人の任務に因て、之を全うし來れるものゝ如し。爰に其一例に供すべき、近來の實話あり。今之を擧んに、其は此四五年前のことなり。我華族某氏が、十六七歲を以て、學習院に於て、常に優等の地を占めたる結果として、宮内省より撰拔せられて、英國へ留學を命ぜられたり、其後彼

國より其實父の子爵に送られたる書翰より、云ひ越されたりと云ふを聞くに、某氏が寓居は、其主人は遠隔地の學校の教師にして、一周に一兩度の外は、歸り來ること無く、家には常に其妻と、年十六歳と十三歳とになる、姉妹二人の娘ありて、之が留守を爲し居る家にてありしと云ふ。然るより、某氏が此家に寓してより、其姉妹二人の娘、特に日本の貴族なりと思ひての好意なるか、眞の兄弟を愛するよりも、猶深切に之を待ち、其食事の時の如きは、何から何までも其世話實に至らざるところ無りしが、或日の夕方例の如く、一棨に對ひ打揃ひて、四人共ゝ晩餐を喫し、姉妹の娘其周旋最も力め居りたる折しも、其母突然妹娘の十三歳なるに向ひて、汝等は、此日本の某氏の爲め、深切を盡すこと至れりと云ふべし。某氏は數千里を隔てたる絕東の國より、遙々我國に留學せる

人なれば、之に深切を盡すは最も宜しきことなり。然れども、如何せん、某氏は日本の人なり。我國は英國なり。而して國と國との交際は、人と人との交際ゝ異なること無くして、時ゝ或は互ひに利害を異にし、意見合ざることの出來りて、條約破烈し、共に敵味方となりて、戰爭に臨まざるを得ざること、これ無しとも保し難きことなり、然るに斯ることは、容易に有るべきことにはあらねど、萬に一も不幸にして、然る場合ゝ望むことのありたらんには、如何ゝ親しき某氏ゝも致せ、聊かも用捨すること無く、自ら手を下して之を殺さねばならぬことの、出來まじきものにもあらず。若然ること有らんには、汝は如何にするや、其心得方を聞たしと、云ひ出したるに、妹娘は、唯赤面して何とも答ふること能はず、緘默りて居るまゝぞ、母は彌迫りて、此は國民たるものゝ、肝腎

なりとて、頻りに逼られ、唯泣ぬばかりに、困り果たる體を見て、母は方を轉じ、更に姉娘の方に向ひ、汝は如何に心得居るかと問へば、姉娘も某氏に對して、氣の毒にや思ひけん、是亦面色朱の如くに變じながら、徐ろに母に答へて申すやう、然ればなり、凡此交際には、國と國との公の交際あり、人と人との私の交際ありて、此我々姉妹の者は、日本の某氏と親しくするが如きは、全く私の交際なり、母上の御問題は、即ち公の交際に就てのことなり、私の事は兎にも角にも、其利害得失を及ぼす所一己身に止まりて、小なり、公の事は國家の上に係りて、其利害得失の及ぶ所、甚大なり。之を比較するに、大小輕重の分、極めて判然ましして、私事の爲に、公事を枉ぐ可からざるは、多言を要せずして、明白

なり。然れは母上の仰せの如く、萬々有るまじき事にはあれど、若も不幸にして互ひに敵味方となりて、戰鬪を爲ざるを得ざる場合あるに臨まば、私交を以て公交には替ふ可からざること、云ふまでも無きを以て、國家の爲には、如何に私交深き人と雖も、之を殺さゞるを得ざることあるは、實に是非無きことにて、我我は常にさる不幸なることに遭遇せざらんことを、祈るの外無しと答へたれば、母は之を聞て、更に妹娘の方に向ひ、今聞く如く、姉は流石に、年も多く取りて居るほどありて、能く内外公私の分ちを心得居れり。汝も能く聞て心得居るべし。凡國民たる者は、斯ることをば常に能く辨へ置ざるを得ざることなりとて、猶語を續ぎて、國家の重んずべきを覺し、極めて懇切に所謂英國魂を、其腦裏に注入したりとぞ。某氏は傍に在りて、此始終を聞き、實に英國の宇内の

强國となり居るも、故無きにあらず。母親にして女子に對してすら、斯る家庭の教育あり。其男子に對する教育思ふべしとて、甚之に感服したるよしを告來りしとなり。此一話にても英國婦人の、其國家に對する任務の重きを知るべし。某氏は女子に對してすら、斯る家庭の教育ありと云ひ越されたれど、女子に此教育あればこそ、其女子成長の後母となりて、又其子女に同じ教育を施すことをも爲し得ることなれ。然れば英國人の英國魂强きも、亦主として其婦人の感化する所多きに居るを知るべし。斯の如くにして、英國の海軍を張り、航路を擴め、英語を主唱し、英國魂を强からしめて、其國力を膨脹せしめ、以て世界の强國たる方今の地位を得たるものは、專ら婦人の任務を盡したるに因るものにて、其功績も亦莫大なるを思ふべし。而して余が今英國婦人の功勞を擧るも

のは、徒に彼を賛美するの意に出しに非ず。要するに我　帝國は、亜細亜の東首に在りて、一島國たること、英國の歐州に於ける一嶋國たると、相似たる國なり。然も近時忽ちに勃興して、漸次に世界の大海王國たるべきの位地に立る國なり。故に我　帝國は、自今海軍は振起せざる可からず。航路は擴張せざる可からず。國語は廣通せしめざる可からず。大和魂は彌一國民の腦裡に注入せざる可からず。國力は増澎脹せしめざる可からず。斯の如く數へ去り數へ來れは、我　帝國の今日も亦英國が方今の英國を爲し來れる或時代に、甚能く似たるものあり。而して英國は婦人の重且大なる任務を盡したる、結果を以て、現今の強大を爲したること、既に云へるが如くなれは、我　帝國をして、今後世界の大海王國たらしめんと欲せは、帝國婦人も亦其任務を盡さゞる可からず。

我帝國婦人にして其任務を盡すべきものとせば、既に經驗ある、英國婦人の成蹟を擧るも、亦無益の事に非さるを知るべし。嗚呼、將來に對する、我　帝國婦人の任務も亦大いなる哉。

女子教育一班

三輪田眞佐子

緒言

世に、女子教育を論ふもの、いと多く、從ひて、女子教育につきての著書も、亦、少からず。されは、今さら、千篇一律の議論を、あつぶすま重ねんも、益なく、異口同意の文章を、おづたまき繰かへさんも、用なかるべしといへども、おのれ、曩に、女子の本分を著し、日本女子は、斯くあらざるべからず、あ

るは、斯くあらまほし、あるは、斯くあらずもがなと、一切女子の標準を述べたりき。これにつゞきて、女子處世論を、本誌にかゝげ、紫式部のよみたまひける「しりぬらんゆきゝにならすしはつ山よにふる道はからきものぞと」といふ歌と、同感なる世界に、身を處する方法を述べつ。こゝに於いてか、女子、その本分をつくすに足る資格を養ひ、又、女子として、身を、世に處するに足る技倆を練らんには、如何すべきかといふ第二の疑問起らん。これ、女子教育につきて、一言の止むを得ざる所以なり。

蓋、世の、女子教育に關する書の、千篇一律、異口同意ともいふべき點にして、おのれも贊成なることは、煩しきをもて、今は省きつ。たゞ、世人の、あるは、宗教に傾き、あるは、陋弊に陷り、あるは、摸擬を主とし、あるは、遊惰に流

るゝなど、未、一定せざるふし〲のみを述べんとす。且、普通ゝ、教育を論ずるものは、多く、教育者の注意を促すを目的とすゝめるも、そは、廣く、讀者を益せざれば、たのれは、教育の方法より、寧、直接の訓戒ともならんことを撰び、單に、教育者のみゝ、相謀らんためならずして、女學生は更なり、一般女子の心得にもなれかしと祈るなり。希はくは、兒を懷く婦人も、針をもてる少女も、亦、讀みたまはんことを。

抑、女子は、國家德風の淵原なり。果して、邦家の隆盛をれもふものは、女德を養ふことを忽にすべきものかは。國民の强弱は、母の强弱に基因す。必、武威を、宇内ゝ輝かさんと願ふものは、女子の體育を顧みざるべからず。男女の賢愚は、その母に遺傳するのみならず、その育兒の方法如何に由りて岐るゝも

のなり。眞に、社會の文化を欲するもの、豈、女子教育を忘るべけんや。人生萬端の業務、其の半は、男子の盡すべきものにして、他の半は、女子の果すべきものなるに、女子を教育せずば、其の大任を如何せん。凡、世の快味は、殆女子の主るものなれば、其の快事を、ます〳〵、有德高尙、且、永遠に絶ゆることなからしむるもの、女子の天職なり。今日、女訓を重んずるは、かゝる天職を全うせしめんためなればこそ。されば、最早、天下一人も、女子教育を無用視するものなかるべし。

若、女子教育を、口もて言ひ、筆もて書かんも、實行せざるときは、人間の慈悲恩愛、日に消え、世は、乾燥無味の風に化すべし。國民の智識は、月に衰へ、世は、暗黑慘憺の狀を呈すべし。あはれ、世人、これを恐れざるか。加之、教

育なき女子は、人は、何事をなさんために生れ、如何にして死ぬべきか。將、何ものが、人の幸福なるか等を知らで、蠢々として、生涯を過ぐすめり。今日、女子の就學生少きは、誠に、その女を愛する人少きがためか。あらず。されば、何故ぞ。思ふに、女子教育の振はざるは、必用を知らざるために由らじ。わきて、征清の擧ありて以來、愈、國民の道德、體力、及、智識の養成、あるは、殖產、工業の必用を感じ、從ひて、此等の基礎ある女子教育の、一日も怠るべからざるを知らざるものなかるべし。然るに、女子教育、速に、盛なる萠をあらはさざるは、他に、原因なかるべからず。この原因こそ、研究すべきものなれ。いざ、天下の女子を教育せんとするもの、共にみがきて、その道宜しきを得てしがな。女子みづからも、いそしみ學びて、天與の幸福を受けよかし。深山の花

さへ、たのづからなる煦育をうけて、天眞、いよ〳〵、美しきものぞ。野邊の鳥さへ、わざとならざる敎に從ひて、天命を樂しむなるに。

史談

妓王の事

壚井ふく子

妓王といへど、世の人、大方は、必ず徒らに艶を以て、時の相國に仕へたるもの丶やうにのみ、思ひなせるが多からむが、中〳〵にさる卑ききはにはあらず、色にめでにし淸盛はあれど、色を以て仕へたる妓王にはあらず。國の爲め、生民のため、丈夫も容易くはおよび難き大功をぞたてにし妓王なりけり。さるを平家物語には、艶なる事をのみ喋々して、その功をぞ、露ばかりいはざるこそ口惜しけれ。されど、此處には、其平家物語に委しく記しある方は、今更に繰返すも要なければ、大凡にはぶきて、世に知られぬ功をぞ、書き記るさむとす。

妓王は、近衞天皇の御代に、北面の武士なりける江部莊司麿時長と云ふ者の長女にて、此の時長といへるは、彼の保元の亂の起りたるとき、家を忘れ、妻子を捨て丶、國の爲め、君の爲め、遂に醜

の御楯と仆れ果てたる無二の忠臣なりけり。忠臣の妻には節婦多く、節婦の子には孝子多しとか。うべなるかな。時長の妻、やがて妓王の母なる刀自は、夫の戰死なしたるを、一度は悲しく思ひて、身のおき所もなきまでに、なげきあこがれたるが、あさましや、武士たるものゝ妻が、武士たる道に仆れたる人を嘆きて、何かせむ、草葉の陰に聞ゑなむ、如何ばかりか、甲斐なき奴と、怨みも、恚りもえたまはむ。恥かしかりき。今よりは、唯々夫の忘れ片身なる子供を、大切に育みて、世に恥かしからぬ人と成らんやう心懸むこそ、亡き人への道なれ、又母たるものゝ道ならめとて、夫れより妓王妓女と云ふ姉妹の幼子をば携へて、故郷なりける近江の國北村といふ里へ歸り住みぬ。

思ひがけなき世の中の浮沈に、定まれるよすがも、たつきもあらぬ身のとみに、困じたりけるが、刀自、もと鼓をうち、舞ふことに妙なりけれど、かゝる爲めとは思はざりける技藝を、人の子の習はむと云ふに敎へ、又或は、人の家の招ぐに應じなどして、母女二人りが玉の緒を繋ぐの材として、日を送りける程に、關守なき月日は、昨日とすぎ、今日とすぎ、いつしか姉妹の子も、大人しくなるに從ひ、母の聲つきをまねび、母の手を振り習ひ舞ひつ歌ひつするものから、漸々に妙になり行きて、二八と數ふべき頃となりては、中々に、母にも勝れたる上手と成りぬ。かてゝ、天の磨ける玉の容貌の美くしさは、あしたの花もねたみ、夕べ

の月もそえまむばかりならず、その心ばえのうつくしさは父にて、母に仕へかしづくさま、身のおきて振舞ひ、賤しき境遇に浮沈する少女とは見えざりけり。里人等は之をもてはやす事限りなく、或は黄金白銀を數多出して、庭の眺めにせまほしといふあり、或は月臺玉樓を搆へて、共に住まはむと云ふもあれば、賤しききはに落ちはふれたりとて、もと浮草には誘はれぬ母子、さる事は耳にも入れず、心を一向に淸き流れにすましつゝ世を送りたり。

或日、母刀自、姉妹の子を膝ちかうよび、兼ても云ひにし事ながら、父君は保元の亂に、國の爲め、君のため、武士の數に漏れず、戰死なし給ひぬ。併るに母なる此の身は、口惜しくも、かゝる賤しきなりはひをなし、此の身ばかりか、御身たちさへ、いつとなく、かゝる業をならはしめし淺ましさ。親がひもなき此の母。御身たちも、嘸かし、口惜しく思ひてならむ。何事も浮世の習ひとあきらめてよとて、涙を拭ひければ、柔和しき姉妹母の言の葉をきゝも終らず。勿体なきことをな仰せ給ひそ。父母の庭の敎へ揃ひてありてだに、撫子はむづかしきものときゝ侍るものを、父君をば失ひ奉りても、かく姉妹の生ひ立ち侍るは、唯、母上の深き御情の露にあるものを、などかは口惜しや、親がひもなき母よ等と覺え候べき。餘りに情に過ぎにし御言の葉、姉妹の冥加の程もおそろしき心地致し侍りぬ。卑き生活と仰せたまへば、世の中なれば、何の恥しからむ。潔ぎよき父君のわ

すれ形見、情深き母上の御手に成長せし身と思へど、何となく、人の前、世の中にも、榮あり、面目ある心地し侍りぬ。妾等も、父母の子。いかでか、淸き心は忘れ候べき。此後、必ず〳〵、さる御事に、御心を惱やまし玉はぬやうにと、妓王の言の葉につゞきて、妹も、又、誠に姉上のの玉ふ如く、かよはき御手一つに、はぐくみ玉ひし母上の御いつくしみ、並〳〵の事には侍らぬを、いかで大凡に思ひ奉るべき。必ず〳〵、さる勿體なき事をば仰せな玉ひそと。右より左より、姉妹の慰むるに、刀自は、いよ〳〵云はれはてゝ、賢き子や、御身等の、さばかりに生ひ立ちしを見るにつけ、何れか一人り、男子にてありなば、日來我が思ふ志をも、はたし得られむものをと思ふは。

妓王よ、妓女よ、御身たちも兼ねて知らむが、此の地は、水の便り惡しくて、里人のくるしみ、なやむこと一方ならぬを見る毎に、父は國の爲めに戰死をもなし給ひし人、母も、せめては此の地の爲めに、水を引きて、所の人の嘆きを救はむとおもへど、女子の身の、夫れだにも叶はぬ口惜しさよとの母の言の葉を、妓王はうちきゝて、里人等の困苦を、さばかりに思ひやり給ふめでたき御心。仰せの如く、妾たち、男の子にてありなば、お志をも、さばかりは、慰め奉るよしも候はむに、さらぬころ、自らも口惜く覺え候。さはあれ、さばかりに思召給ふものを、女子なればとて、斯くて止まむも、餘りに口惜しく、且はなは年長く、里人の苦しまむも、哀れに悲しう覺え侍れば、今よ

り都にのぼり、相國の力をも頼みて、兎も角も慮らはむと思ひ侍るが、此の義、如何に思召給ふかと云ふに、母もうなづき、其方の思案、よくこそ申されたれ。叶はぬ迄も相國に願ひて見む。我身一人の事にあらず、多かる人の嘆きを訴ふなれど、惡しうは咎めもなからむ。さらばとて、それより、母子三人、急ぎて旅の仕度整へて、都に上りぬ。日ならずして、都に着きぬ。直に淸盛の館に推參して近江なる妓王と申す者、此度是非に願はまほしきよしありて、はるぐ\と參りたる由を申し入れしに、淸盛も、妓王を歌舞の名人といふ事、兼ねて聞きたり。榮華にあきたる此頃、何がな珍らしきものをと思ひ居る折柄なれば、すぐに對面なしぬ。

飾らずとも、麗容光るばかりなる美人が、今日は時の相國に對面せむとて、粧ひをこらしたる事なれば、妓王の容姿は、殊に一入の美しさを添へ、月のかつらのにほひこぼれたらむばかりのあてやかさ。雨となり雲となりし唐土の宋玉、國を傾け城を傾けし李夫人も、かくはと思ふばかりなるに、入道は痛く歡びて、さて云ふやう、御身は歌舞にたくみなるよし、兼てきゝおよべるが、所望なるに、何にても、面白きを、一曲うたひて見せよと云ふに、妓王も、願はむと思ふ事あれば、辭むによしなく、望まるゝまゝ、今樣をうたひ、又、舞ひを成しけるに、佛の國にありてふ鳥の、迦陵頻迦もかくこそと思ふばかりの聲、風に靡く柳、雨に萎める花とも、堪へむ方なき姿なるに、淸盛

は、魂も天外に飛び果てゝ、只管に感じよろこび、母なる人には、毎月百石百貫を賜りて、妓王をぞ、其まゝ殿にとゞめおきて、歸さゞりけり。

さる程に、京中の白拍子ども、妓王の覺えめで度よしをきゝて、羨やむ事大方ならず。誠に妓といふ文字は、めでたきものよ。我を彼人の幸福に、あやからむものなどいひて、或は妓一、妓二、妓福、妓徳などとて、急に字を改むるものさへありけるとは、おかしさの世の中や。清盛入道は、妓王をめづる事限りなく、或日、妓王に向ひていふやう、汝は、兼ねてより、我に願ふことありといへるが、今こそ申せ、何なりとも叶へえさせむといふに、妓王大によろこび、異なる願ぎ事には候へど、妾が年久しく住みてし土地に侍る北村のほとりは、誠に水の便り惡しくて、里人の苦しむ事一方ならず。心なき身にも、思ひやられて、いとほしく侍りぬ。願はくは、我君の御仁心もて、さるべき山河の水を引き給はゞ、妾ばかりか、北村わたり一面の里人が、ありがたき冥果に侍るとの思の外なる願事に、清盛はいたく燃きたるが、二つなき妓王の願ふ事、いかでか辞むべき心あらむ。直に、妹尾兼廉と云ふ者に命じて、野洲川の流れをぞ分ちて、東北よりひきたりしかば、其明年より、土地潤ひて、民少しも苦しまず、五穀大にみのりたりければ、里人等の悦ぶ事限りなく、こは全く妓王御前の計ひなればとて、其の引きたる流れをぞ、東妓王井川、西妓王井川と名づけて、有り難きものにいひはやしぬ。今に至るまで、其の流れ

つきせず、里人等をうるほすと云ふ。げに、めで度母子のいさをならずや。

かくて、清盛入道も、三年がほど、妓王をぞ二ッなきものとめで、妓王も又二ッなき心にかしづきしが、誠に世の中は、花ぞめの人心、其後相國は、加賀の國より、上り來る佛御前と呼べる白拍子に心うつりて、妓王には急に暇を給はりたり、妓王は兼ねて、かくあらむと思ひ設けたる道なれど、流石昨日今日とは思はざりけり。且は、三年がほどの淺からぬ契もあれど、すゞろに名殘をしく思ひたれど、又引き返すべき入道にもあらぬを知り居れど、強ひては爭はず、泣く〳〵

萠え出るも枯るゝも同じ野邊の草
何れかあきに逢はではつべき

と一首の歌をとゞめて、館をぞ立ち出でたり。

京中の上下、この由を傳へきゝ、共に遊むとて、先を爭ひ、文を送り、使を立つれど、妓王今更に人と遊ぶことをなさざりけり。

かゝるに、或日清盛より直ちに參るべきよしの使ありけれど、心すゝまねど、辭まど、老いたる母にさへ、災のかゝらむ事を恐れ、急ぎ行きたるに、日頃召されたる所へは入れずして、遙かに下りたる所にしつらへたる座敷に入れおき、やがて、入道殿出で給ひて、此の頃は佛御前の兎角に、つれ〴〵わづらはしげなれど、歌ひ慰めよとぞの給ひける、あさましきは、清盛が振舞なりけり。並〳〵の女子ならど、如何ばかり口惜しく、うらめしく、氣も狂ひたらむが、妓王は更にうらみず、

我身は如何に憂きめを見るとも、母妹の身に恙なかれと思ふ一心に、快く今様をば、二返しばかり謡ひすましたり。其歌のいみじくあはれなりしに、入道も感じ、神妙なりとて、當坐の引出物賜り、且つ、此の後は、召さずとも、折り〳〵は來りて、佛をば慰めよとぞいひける。清盛が言葉、餘りにあさましき限りや。妓王は入道の心はうらまねど、數ならぬ身には、かくてもあれ、さばかりにつれなき心もて、萬の人を統べ行かば、平家の武運も、やがてはおとろへむ。さりとて數ならぬ身、言の葉を盡くして諫めしとて、いかできくべき清盛かは。いやましに怒りを増さむのみ。此の上は、陰ながら、御武運の程を祈らむよりはとて、夫れより、只管に法の道にたよりたりと云ふ。

稲生春子の傳

永石薫風

稲生春子は江戸の人なり、父を河瀬外記といひ、母は上田を氏とす、元和の五年といふ年の十一月に生る、年五歳にして母みうせにしかば、後の母なる柳谷氏にやしなはれき。心柄いとすなほにして、父母に事ふるにも、つゆばかりも其心にたがはず、人となりて、稲生某に嫁ぎけり、つねに心おきて正しくて、かりそめにもたかぶらず、よく夫につかへて家ををさめけり、舅姑は大坂にすめりしかば、つねに文もて消息しつゝ、暑さにも寒さにもとひなぐさむることを怠らず、何事にもつづまやかにして、華やかなるを好まず、されども世のため人の爲ときけば、財をなげうち、力をつく

し、種々に身を勞きて、をしとも思はず、わが僕婢をめしつかふにも、いとゆるやかに恵をかけてしかど、みな感け慕はぬはなかりけり、婦の藝としもいへどわたらぬくまなく、わが家の裁縫のわざよりなにくれのことまで、他人の手によせず、みなみづから勵みつとめけり、ことに祖先の靈を祭ることを怠らず、月毎のついたち十五日は更にもいはず、忌日には必ず忌み清まはりて、手づから物を供じ、又初穂のものなどをうれど、その日を待ちて必ずまづ供す、もしおのが身に近き親戚の忌日にあへど、只心のそこにしのびつゝも、婦たる者はかくあるべしとて、舅姑の祭と差別を立てゝ、ひとしくせず、うみの母はいとけなきほどに、はやくみうせてしかど、そを知れる人にとひきゝつゝ、そのありし間のあらましをものして、七冊の書をかけりき、そが中に父母舅姑につかへ、身を修め、家をとゝのへん理　自らそなはれりといふ、年ごろ佛の道をたふどひ、はた儒道にさへくはしくして、ことに朱子小學の書を好めり、つねに人にむかひては、子たる道も、婦たる道も、この書にかきつくせりといはれき、また女誡といへる書をものし、和歌をさへ好めりしかどよめる歌數百首ばかりになれり、中ごろ家やう〳〵、貧しくなりしかども、いさゝかも心にかけず、專らわが子どもを敎へ導くに心を用ゐ、子の心をはげまし、行をいましめ、朋友を擇ばしむるなど、用意至らざることもなかりけり、されど子もよく身を正してけり、人みないへるやうかく子どもの

身をおこしつるは、父の薫陶にはよれども、母の力多かりとて、もてはやしけり、元祿の八年正月八日、齡七十七にてみうせにけり、さきに我みまからんことをや覺りけん、みづから文公の家禮にならひて、衣衾をとゝのへ、なほこまぐゝしく後のことゞもかきのこし、子と妹にも書をのこして、身を修め、家をとゝのへんに、要とあるべき事どもを記して、おつるくまもなかりけり、これをみるものきくものとなく、衣手をうるほさゞるはなかりけり、同じき月の十二日といふに、神樂が岡の東なる迎稱寺といへるにはうむれりき。子なる宣義、當時儒學にきこえたかゝりし伊藤長胤といへる人にこひて、ありしことゞもを文にもし これを鐫るゑりつけて、なきがらに添へて埋めきとなん、その銘にいへらく、(原文は漢文にて、紹述先生文集といへる書の卷の十四にあり、これ伊藤長胤先生の文にこそ)

於戲孺人、河瀨其氏、婉德娠賢、內治斯美、上孝舅姑、下恩臧獲、既嗜儒雅、兼崇經籍、無非無儀、壼彝攸範、維正維淑、凜不可犯、神岡之左、爰宅其魂、佳城葱鬱、式裕後昆、

仙史いふ、孝女烈女、貞婦に節婦に、古より、大方は大難の局にたちて、親にかはり、夫にかはりて、命を刃におとすが多かり、かゝる折ならでは、そのみさをのあらはれがたき世の理なるは、口惜しき限りならずやは、春子が如きは、始終一貫、よく婦道をつくして、天年をへつるはいとまれにしてまことに、婦たる者の鑑といひつべくなん、

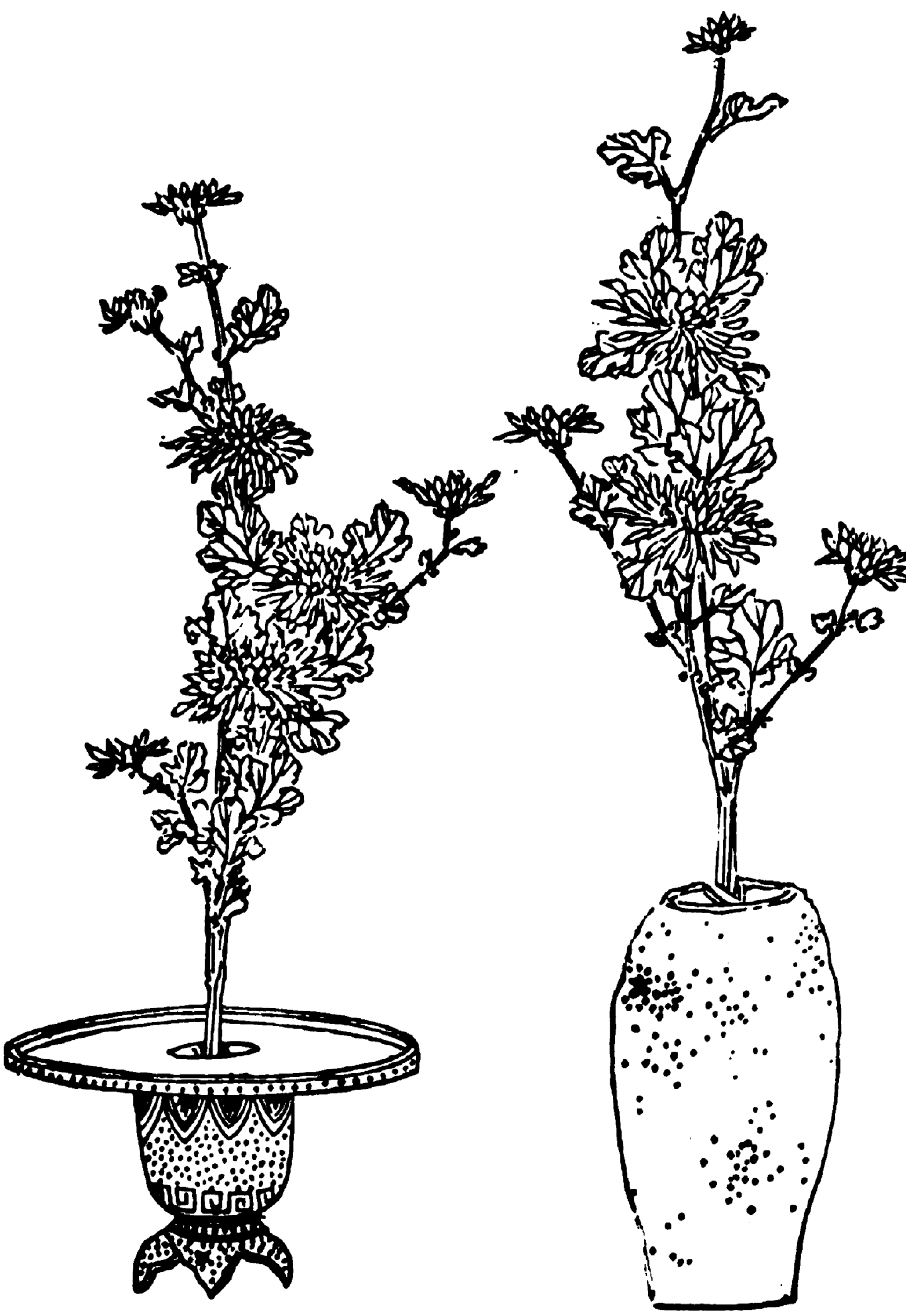
家政

活花（第三）

田邊和氣子

花は春のものよりかき始むべきなれども、今夏菊のさかりなれど、菊を以て圖を著す、草花も活かたに差なし、先づ菊を活むとする時は、よき程に寸尺を定めて根を焼べし、五分計りこげたるとき、さかさまにして水をそゝぎかけ、又しどし水へつけ置後活るときは、花久しくたもつなり、菊も其性質により、焼かずとも水を上るあり但し花大なるは焼方よし、これも葉蘭に同じく始めは五本、又は七本より習ひ、花瓶の大小によりて、いかほど活るも差支なし但し數は半なり、花瓶はいかなる形をも用ゆ、菊一種活るときは、可成一色をよしとす、但し都合により、眞。副。を白くし、体。を赤くなし、又は眞。副。赤く、体。を黄、白、などにする事もあり、三色は交ざるをよしとす、活むとする始め、葉の元に細かき葉生じたるを、叮嚀にとり莖のいたまぬ様にして取扱ふべし、活掛て葉の早くしをるゝはいまだ其業のいたらざるにて、菊のつみにあらざるとしるべし、又小菊は他流にて一種捨て活る事あれど我流はかゝる事なし小菊は大旨他の花か又は木の根締に用るなり

圖はつぎに、かゝげたり。



菊五本の活うつし

七本の活うつし

だいどころ

鼠頭魚照焼

鼠頭魚を披き、骨を去り串に刺し、最初生肉に生醤油をつけ、皮の方より能く焼き、返して又醤油をつけ焼くこと二度、焼けたる時、味淋の煮きりと醤油とを入れ煮詰たる汁をつけて乾かすなり。又汁の中に(紅赤味噌)味噌を少し加へたるも、照り出てよきものなり。

鮑の鹽蒸

鮑の殻を去り、腸を取りて、冷水にて洗ひ置き、鍋に鹽水を入れ(鮑の上に水の少しのる位の分量にすべし)之に洗ひ置きたる、鮑を投し、文火にて水のなくなる迄、煮詰め、それより、鮑を取り出し、更らに蒸籠に入れて、暫らく蒸すべし、但し其切り方は、好に従ふべきも、先づ横に、小口より二三分位の厚に、ソグを宜しとす。

鶉の椀盛

先づ、鶉の毛を引き、首足を断ち、腸を去り、骨のつきたるまゝ、肉に鹽少量をふり、細かにたたき、好き程の大さに丸るめ、ざつと湯て置き、次に芋茎の皮を剝ぎ、二寸位の長さに切り、之を細く引きて、鹽を少し入れ湯で置、それに片栗麪の、湯でたるものを添て、椀に盛り、食鹽と、醤油にて、煮出に味を付け、其沸騰するを待ちて、右の椀に盛り、徐かに注ぎ入るべし。煮出しの取方は、湯の沸騰するを待ちて、けづりたる鰹節を

多量に入れ、直におろし、沈澱せしめ、用ゐるを佳とす。

ビフ蒲鉾

先づ、脂肪無き牛肉を、極々細かにたゝき、之を摺鉢にて、充分に摺り、之に雞卵の黄身、醤油の外に、麪包の身を、水に浸してしぼりたるを入れ、更らに摺り交せて、其充分に混和したるを待ち、海苔巻の鮨を巻く如く、小さき簾にて巻き、其上を布巾にて包み、熱湯に投じ、四五十分間、湯で冷ゑたるを待ちて、好き程に切り用ふべし。但し牛肉一斤なれば、玉子は一個醤油壹勺位、パンの身は、一握の割とす。

巻珍汁

里芋、人参、隠元、大根、茄子の類を(茲には折柄の種を記すのみ、種は季節によりて變るものとゑるべし)小口切りと爲し、湯で置、次ぎに鐵鍋にて、極少量の胡麻油を沸立て、之に水を絞りたる豆腐を入れ、暫らく炒りて、前の種物を投し、好く攪きまはし、後煮出しを注ぎ、醤油にて鹽梅し、二三十分間煮るべし、但鳥肉を入るるも佳とす。

茗荷漬

茗荷を好く洗ひ、三分位の大さに、小口切りと爲し、又縦に四ッ割り位と爲し、沸湯を注ぎて、上げ置き、酒石酸を湯にて溶きたるものに、味淋の煮きり、少量を加へて、鹽梅し、之に右の茗荷を漬け三十分位經て用ふべし。

學園

わが學園

塩井正男

此の頃、西氏より、おのれに、女鑑の學園に筆を採らむ事の頼みありたり。おのれ思ふ所あれど、悦びて承諾きぬ。おのれが思ふ所とは何事ぞ。おのれがおもふ所、やがて、此の學園の主意の存する所、此のわが學園の方針の定まれる所なれど、おのれが思ふ所を、此處に、豫め、言短に記るさむとす。

女鑑の紙上、學園と云ふ欄を置かれたる事、今日初めて置かれたるにあらず。令孃淑女が耳目に心意に、面白く益あるべき千紫萬紅のあるあれど、折り〱、此の欄内に植ゑられたる、あはれなりける、美しかりける、めでたかりける、妙へなりける、面白かりける、有益なりける、さま〲記臆ゑたまふならむ。おのれも、面のあたり見たる事、一度ならず、二度ならず、屢ればねたり。されど、そはいかなる園主の主意なりけむ、詳しくは、おのれは知らず、知る要もあらぬなり。果して、わが學園の主意の如く、方針のごとく、おなじやうにありたらむか、細かには、おのれは知らず、知る要もあらぬなり。故に、過ぎつるは、總て昔の學園として、おのれは、兎に角に、おのれの主意、おのれの方針もて、新に學園を開くものなり。

わが學園の主意は如何に、方針は何ならん。學園

といへど、學問に就ての言の葉を植ゑむずる園な
る事は、其は、今更に、新らしくいふべき要もあ
らず。されど、單に學問といへど、いと廣き世界
なり。文學、理學、法學、醫學、工學、農學と、
大要を數へたるばかりにても、五ツ六ツあり、其
の中を、哲學、心理、道德、文章、言語、天文、
地理、化學、動植物、民法、刑法、經濟、社會、
內科、外科、土木、機械、鑛山、建築など、一々
數へ來なば、狹く限りある紙上に、いふべきもの
に非ず。學園といへど、我學園は、これ等皆の學
問に就ての園ならむか。否々、決して然らぬなり。
わが學園は、理學を說かず、法學をいはず、醫學
工學農學を知らざるなり。我學園は他ならず、則
ち、文學の園なり、文學殊に純粹文學の園なり。

純粹文學殊に日本の純粹文學の學園なり。軈て、
日本の純粹文學として知られたる書物の、美しく
名あるを取り出でゝ、これを說き、これを評し、
如何なる性質のものなるか、如何なる品の物なる
か、如何なる價値あるかを記して、令孃淑女に、
日本文學の何物たるかを知らしめ、又、令孃淑
女の、能く文學の美なる天地、文學の快なる世界
に、樂まれむ事を希望し、大に女子社會に、文學
を獎勵せむとするものなり。これ、吾人が學園に
筆採らむとせる主意なり。

吾人、何故に、令孃淑女の間に、文學を獎勵せ
むとするか。無意見無所存の無鐵砲の計畫にはあ
らざるなり。大に意見あり、所存ある所にして、
れのれが豫め此の處にのぶべくれもふ所なり。吾

人は、文學を以て、最能く女子の德に適ひ、又、最能く女子の德を美ならしむるもの、完全ならしむるものなりとれぱゆる者なり。これを以て、必竟、文學を奬勵せむと欲するもののみ。

文學は、最能く女子の德に適したり。女子の德とは如何。則ち、優美温和なるをいふ。優美温和、則ち、女子の德なり。優美温和は、女子が社會生存の地にして、優美温和なるが故に、女子決して男子に讓らざる地位を保せるなり、優美温和を去らぞ、女子遂に一種の下等動物のみ、劣等動物のみ、狐狸の如きのみ、猫犬の如きのみ、二足動物といはむのみ。優美温和なるが故にこそ、女子、萬物の靈たるなれ、人間たるなれ、社會の母たるなれ。近時一種の白痴者ありて、男女は同物なり、同權なり、同地を踏むべし、同行を爲すべし、同じく剛なれ、同じく猛なれ、同じく勇なれ、同じく亂なれ、同じく暴なれ、太古を見よ、創世を見よ、男女無差別なりしにあらずや、今日女子の狀態は、原始に背きたる者なり、違ひたるものなり、女子の性にあらざるなりといふ人あれぞ、これ、必竟、白痴の云ふ所、狂癲者の語る所、笑ふべくあはれむべきものなりと雖、世間には、又、これに雷同する一種の痴者狂癲者あり、無慘なることにあらずや。太古創世、果して男女の區別皆無なりしか。我國のごときは、慥に區別ありたりと覺ゆ。よしや、假に無差別なりしとするも、太古創世は、如何なる世なりしか。蓋し、混沌たる世界、朦昧なる社會なりしにあらずや。混沌たる世界、

曚昧なる社會の狀態より、いかでか、靈妙なる社會の秩序精神と爲すを得む。太古は、社會の創業なり。いまだ充分に万有の精神秩序の表はれざりける時なり。かゝる時の狀態を以て、決して万有の眞精神眞秩序と爲すを得むや。しかのみならず、過去數十年の社會の歷史を見よ。男女、慥に有差別の歷史を有して、今日に至れり。社會の事物といふ者は、偶然の物に非ず。必然にして起り、必然なる理由を以て、秩序ある進化を爲す者なり。今日、女子が、男子と、品を異にし德を異にする、決して偶然の事にあらざるなり。女子が社會の組織に於ける關係、即ち女子が社會の分子たる責任義務の、如何なる點にあり、如何なる所にあるかを一顧せむ可なり、三顧の要を知らずして、明々白々たるの事なり。

然り、女子の德、遂に男子の德に異れりといへども、決して優劣のあるに非ず。異れむ優劣ありとおもふからに、さま〴〵の誤解も生ずるなり、謬見も出づるなり。男子の德を一括せむ、堅剛にあり、腕力にあり。女子の德を一括せむ、温和に在り、優美に在り。男子の優劣、女子の高下、必竟、此の德の多少によるのみ。此の德の完全不完全にあるのみ。

文學は、元來優美なる言語文章を以て、靈妙なる自然の美、社會の美、思想界の美を、或はうたひ或はかたるものにして、心裡詞間、共に春風の温和、花月の優美なるを要するものにして、又、精密なる節思、微妙なる情緒を要するものなり。思

ふに、能く温和なる、能く優美なる、且つ、能く靜肅なる、能く深微なる女子の天性に德に適へる道ならずや。今日國文學の二祖とも稱すべき源紫二子が、堅强不屈なる男性にあらずして、柔和優美なる女性なりし事も、決して偶然にあらず。古今の大詩人美文學者といふべき者、多くは女性に近き性質の男子なり、女子の德を多量に具へたる男子なりし事も、又忘るべからざるなり。

人、自ら天性の長所あり。此の天性の在る所に據るに非ずば、能く大家と成り、名士と成り、又能く其品格を美ならしめ、其地位を高からしむる事能はざるべし。彼のスコットをして、父の法家に在らしめなば、湖上の美人の優しき花冠は、遂に被ふるを得ざりしならむ。又、彼のゴールドスミスをして、父の素志の如く、商業の巷陌に身を投せしめむには、ウェークフヒールド牧師の床かしき美聲は、遂に聞くを得ざりしならむ。人は其天性の在る所に從ひ、其天性を愈練磨して、赫々たる光りを擧ぐべきなり。天性のある所にあらずむば、徒らに千辛万苦して、遂に一事一名立て難きなり。故に、女子も、其の天性のある所により、其天性を完全ならしめ、以て、其地位を高むべきならずや。女子の天性は、前條に述べたる如し。馬上ゆらゝかに劍を撫して、三軍を叱咤するは、女子の德に適はず。堂上嚴に笏を按じて、万機に參するも、又女子の德に適はず。女子の德に適へるの事業は、唯靜座して、美なる詞華觀念を語るにあり。即ち、文學にあり。それならでは、又美術

あるのみ。これ、おのれが令嬢淑女の間に、文學を奬勵せむとして、此處に文學園、否、學園の園手となりたるの一源因なり。

敎訓を主とせる文學、理想を語れる文學は、いふまでもあらず。文學といふものは、元來、人心を指導し、人世を勸化する力の大なるものにて、風土人情を支配し、時勢時流を造るものなり。我國の史を繙きて、藤氏の時代、白氏文集文選の、如何に世情を支配し、德川の一代、朱子文學の如何に時流を造りしかを見よ、又見よ。壇浦波間の落月、果敢なき平家の末路を見よ、又去て、彼の宗末の殉國の士多く、明末の廉潔の士少きを見よ。又見よ、佛國の革命、獨逸の隆興の當年を見よ。文學の世情を支配し、時代を造る事、昭々として明なり。シルレルが、嘗て盜賊といふ詩を作るや、學生の中に、盜賊を爲す者、多く出で、ゲイテイが文章上に、さまざまの記號を用ふるや、醫者が、病人の診斷書にさへ、これを用ふるに至りしといふ。一片の文辭、よく鬼神のあら神を取りしづめ、醜の大丈夫の心を柔らげし事は、今更いふまでもあらぬ事なり。文學が人心を支配し、社會を動かす力は、なか〳〵に、劍太刀が人の命を斷ち、權理義務が一個人の位地を保護するばかりの細々たるものにあらぬなり。故に文學又大に選擇せざるべからず。取捨せざるべからず、選擇し取捨して、高尚優美なるもののみを取らざれば、大に危險なり。これ、下等有害賤劣無益の文學あればなり。希臘の哲學家プラトーが、詩文家を以

て、人類中の最危險なる人物なりといへるも、強ちに面白からざる言にもあらざるなり。故に、世にいふ文學、皆至美至大の物といふべからず。高尙優美の文學にこそ、至美大至の物なるなれ。されど、又、吾人が此處に女子の德に適へりといふも、又、奬勵せむとするも、この高尙優美なる物のみをいふなり。下等賤劣なる物、余これを眞の文學といはざるなり。又、令孃淑女に奬勵せむと欲する文學にもあらざるなり。

高尙優美なる文學は、人心を高尙優美ならしむるものなり。よしや、自ら文學を作るを知らずとも、よけれ。高尙優美なる文學の天地に優美高尙なる娛樂を樂しむ事を知らど、可なり。元來、人間と下等動物との尊卑は、下等動物は、肉體以上の幸福苦樂を知らざるが故に卑しく、眞の人間は、肉體以上の幸福苦樂を知れる故に尊きなり。文學は、精神上の物なれど、これに娛樂するを知らど、肉體以上の娛樂なり。決して、人間として、恥しからぬ娛樂なり。高尙優美たるべき人の品位氣概を、自ら能く保存せしむるものなり、養成する所のものなり。女子は、いふまでもあらず、家族の母、やがて國民の母、やがて國家の母と成るべきものなり、母たるべきものなり。品位氣概は、殊に高尙優美ならざるべからず、肉體以下の天地を知れるのみにては、遂に家族國民國家の賢母たる事能はざるべし。これ、また吾人が、此處に高尙優美なる文學を奬勵せむと欲する一源因たり。

されど、吾人は、文學を脩むるのみを以て、文學

を樂しむのみを以て、女子の本分とし、女子の事足れりといふにあらず。寧ろ、これは、女子には間接なる分なり、第二のものなり。人の子となり、人の妻となり、人の母となりて、孝子たり良妻たり賢母たるに必要なる女子直接の本分は、充分に之を脩めむ事を欲するものなり。而して、側ら、文學を以て思想を高尚に爲し、女子の天性女子の徳の、蓋し益々高からむ事を望むにあるのみ。而して、唯文學文學といふも、空漠にして據る所なき故に、まづ古來傳り來れる日本文學といふべき面白き書を、つぎ〳〵に擧げ、つぎ〳〵に說明評論し行きて、日本文學といふべき古來の文辭の狀態精神の一片をもつげ、又、これ等の書を自ら披かむ令孃たちに、豫め其の書の結構を知らしめ、且つこれが參考書などを知らしむるの便をも與へむとす。

最期に、一言すべきは、古來文學として見るべきもの數多あれど、もとより、不完全なる万能万知ならぬ人々の作りしものゆゑ、吾人が理想に考ふる如き完全なる良文學は、一もあらず。多くは、善惡利害相混じ、不完全なる所あるものなり。故に、宜しく、これを讀むに當り、其善なる所をのみきゝて、其善ならざる所を聽かざらむ事を望む切也。

ながらへば
またこのごろや
しのばれん
うしとみしよぞ
いまはこひしき

漫錄

高慢獨見は謗憎まる

故人 小山田與清

商鞅が語に、人に高ぶる行あれど世に謗られ、獨見の處あれど人に贅るとはいへり、獨見の處とは、俗にわるくすました奴とも、自分極にきめた奴、ともいふこれなり、又生得高慢なる顔つきと、すました顔つきの者あり、これ父母の遺形にて、いかにともすべきやうなけれど、我面は見ざる人ころにくゝ厭はしく思ふらめと思惟して、いかにも敬愛あらんやうにふるまふべきなり、さやうにつゝしみたらんには、見体よりも、心のよき人とれもひつかるべし、諺に外目八目といひ、人のふりみてわがふり直せともいへるは、よき教訓なり。

謹愼

故人 小山田與清

禍は謹愼の門に入らず、智は禍を免るゝを貴ぶ、とて人は能ろの獨を愼み、生涯不慮の災難を免るべし、天のなせる妖は避くべく、自成せる災は避べからず、予一とせ、妻妹などが、成田の不動詣せしとき、官の過符を請ひて、下總の市川の關を過させたりき、凡江戸より成田詣、中山詣などする、婦女、官の過符を請ふものなし、ろは逆非の渡をわたれど、關所もなければ、わづらひなく往來すなるを、よしもなき過符願かな、關守もさぞわづらはしきわざに、思ひつらん、かたくなしく〱、と笑はざるものなし、されど、不虞の禍ははかりがたけれど、朝廷の法度をかりろめ

にも、犯さじと思惟し、人のそしりいふをも、きかぬ顔して、過したりき、また家督の長子、螟蛉と共に惡人に欺れ、各債を負て出奔し、孫兒いまだ幼けれど、家將に滅んとせしをり、內訴せさせたるやう、家督のもの無賴にて出奔し、嗣子は年幼けれど、祿をかへし奉り、家人に離散せさすべきよし、申させつるに、司丞これを兩長官にまうす、兩長官これをきゝて、げに年齡をいつはりて、家督を請ふは快からぬわざなれども、されどとて、先祖の功勞をむなしく亡さんは、不孝ならずや、實年にかゝはらず、官年もありにかなはゞ、家督を命すべきよし、うち〳〵仰ありて、さて表請し、事ゆゑなく、幼孫家を繼たり、その後れいの惡人、年齡を僞れるをもて、くせ事にれどしいれんと、巧訴しつれど、已に內命を受て、處置したれど、自若として恐るゝ事なかりき、そもそも若年の時、人にあやまられて、危き振舞しつるも、改るに憚らずして、年をかさね、四十にして惑はず、五十にして、天命を知る、ことわりにや、謹愼をもてあまたゝび、災害を免れし事、今は三十年に及べり、家語に愼敬は仁の地なり、また存亡禍福は已にありて、天災地妖は加ること能はず、と云々、東方朔が傳に、身を修めど、何ぞ榮ゐざることをうれへん、又君子は常の形あり、常の行ありと、云々、沈氏弋說に漢の武帝、人を知るといふは、霍光が謹愼して、大事を屬すべきを知れる也、諸葛孔明も、亦云く先帝臣が謹愼なるを知り、終に臨みて、屬するに大事を以す、と

いへり、それ孤を托し、命を寄するも、一謹愼を以て、辨知するに足れり、霍光が親、昌邑王を藩邸に送り、孔明が、魏延が子午谷の計を用ゐざる如き、謹愼の情見つべし、一節見はるれば、百節知るに足る、いはゆる一事が万事也、性命常分あり安危運にあり、豫圖ることなく、謹愼て其身をつとめ、果報を待つにしかじ、金佛は爐を渡らず、木佛は火を渡らず、泥佛は水を渡らず、ころばぬ前に、杖をつき用心にしく事なし、賊過て後弓を張り、喧嘩過ぎて棒ちぎり、木を取出ても、何の益かあらん、鄧艾か蜀の嶮岨の勝利は暴虎憑河の振舞にて、謹愼の人の行ふべき所爲にあらず、宗吾大草紙に、身を修むるとは心を治る也、さに候へば則身を治むるにて候、我かなはぬまでも心がけいかにもたしなみ候が、心遣にて候、心の師とはなれども、心を師とする事なかれ、と申は、人ごとに初一念にうかぶことを、其まゝふるまひ、ほしいまゝに候へば、善惡の分別なく候、能々心を靜めて、道理ひが事を思案あるべき事也、人の敎も敎訓も、才覺にもいるまじく候、我と道理をわきまへらるべきなり、人ごとに心にたがふ事をば、ひが事に思ふならひなり、能々分別あるべし、我心に思ふ事をやめて、人の道理をたつる事、喩ばたまきの端なきが如し、といへり、所詮初一念を捨て、眞實の道理を相互にもとめて、おのづから、我とさとり知べしとなり、雅意にまかせ、我心を本とし候はんずる人は、たとへ道理と心得候はん事も、あさましき事なるべし、

寢覺記にも、萬につけて、善をすゝめて、あしきことをいましめ、心の師となりて、心をほしきままにせざれと見ゆ、

宮女の使を赦す

故人　小山田與清

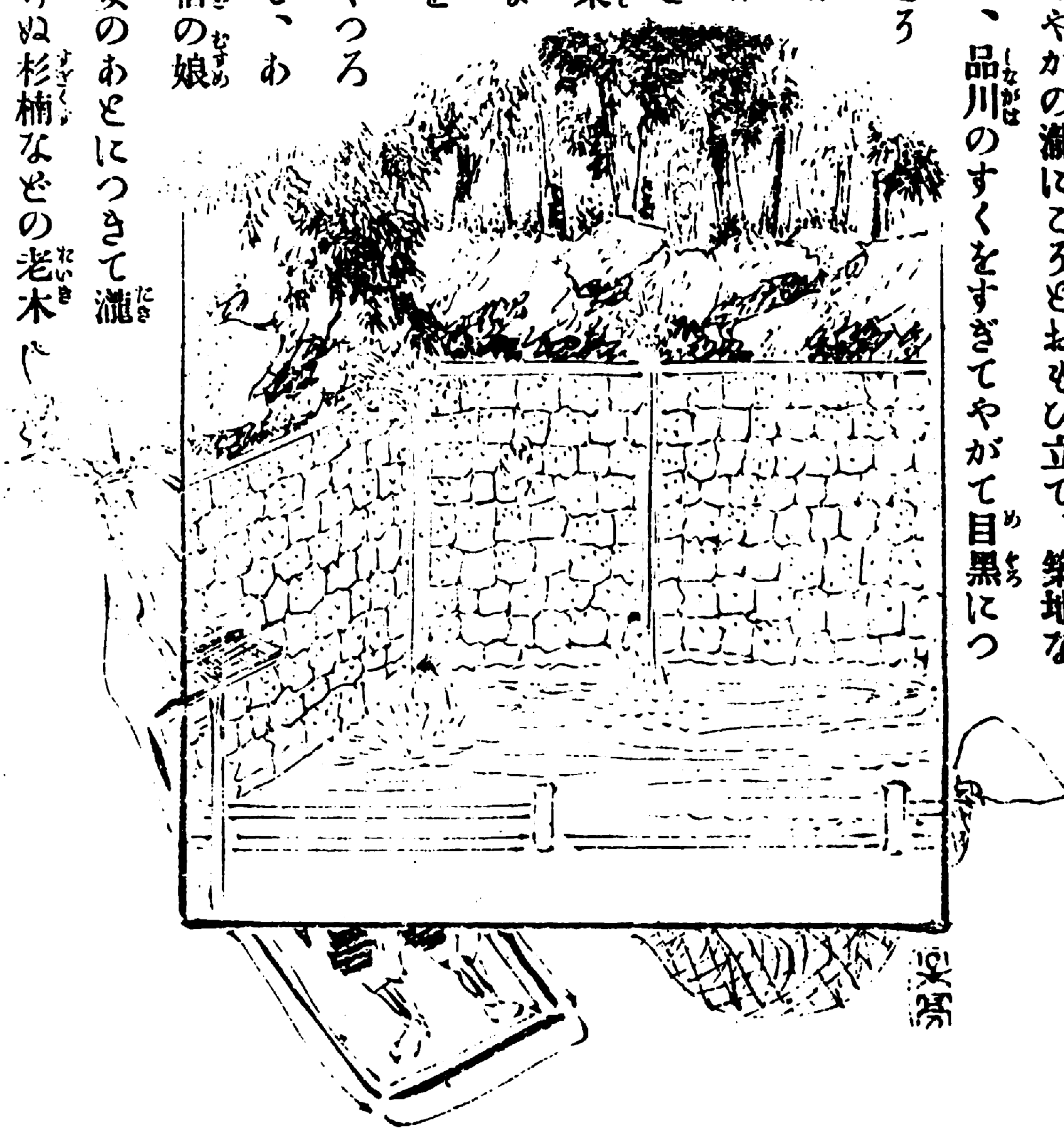
漢土には宮女を出して嫁しむる善政あり、げに女子生涯を宮仕に終るは、その父母兄弟の爲には、恩賜のものをわかつ一利ありといへども、人倫の道にとりてはあはれむべき事なり、武野燭談に、執政板倉重矩朝臣、仁慈の志ふかくして、召仕はるゝ女房、年二十五を限りて、衣服調度をたまひ、嫁くべきよしを示して、暇をたまはれりしよし見ゆ、倡家の女二十五を限りとすべき定めも、今は二十七を年季明といへり、されど一概にいひがたき事あり、輕輩の女官はさてもあるべけれど、重き御達などは、内政にあづかりて、みだりに與奪もなりがたけれど、斟酌あるべきにや、

目黑の瀧

永石德文

目黑の里は、都をほど遠からぬ西南のあはひにあり、この里の瀧の名はたゞ音にのみゆかしときゝわたりて、いまだむすびてもみず、ことしはいかなる空のゆきかひなりけん、あらがねの土もさくといふなる六月ふ月も、一重衣折々はろゞろに寒けき心地して、あふぎうちはさへ、こぞの秋のままにて取りも出さず打過ぎぬるを、八月の七日ばかりよりとみに夏げしきして、今はた堪ふべくも

あらずなりぬ、十三日といふ日、いでやかの瀧にこそとおもひ立て、築地なる宿を立出でゝ、新橋より汽車にのる、品川のすぐをすぎてやがて目黒につきぬ、車ながら見出せど、つたかへでころまだもみぢせね、路のへにはいつしか秋草の花なんさき出たる、四五町ぞかりにして木立ものふりたる岡あり、こゝなん瀧のあんなるといふ、里の西東も志らねど、とりもあへず、ふもとなる角伊勢といへる宿に入りてあないをこふ、あつさたへがたくて志ばし打くつろぎていこふ、さてまづ瀧あみせんとて、あせぢみたる衣ぬぎすて浴衣打きて、宿の娘なる春子とて十一二歳ぞかりなる乙女のあとにつきて瀧のもとに至りぬ、いくかゝへとも志らぬ杉楠などの老木し



がもとに、くま笹ふかく茂り合ひたるあはひに構へたる龍頭二つありて、其が口より瀧二すぢたぎりおつ、向ひて右なるを男瀧といひ左なるを女瀧といふ、さて男女のかゝるに別ちせるなり、瀧つぼは深さ膝ぶしより少し上ばかりにて、底もめぐりも石もてつきかためたり、打向ひたるだにまづ夏心地もせず、かたへなる堂めきたる小きいへにて、衣ぬぎかへて入りてかゝる、水清くて冷けきことはいはん方もなし、數多の人々居合せて、かはるぐゝあむ、たへがたかりつる暑さもいづこにか今は流れうせて、夏のもなかともおぼえずさて

たきつ瀬に神の氣吹やこもるらん
　暑さも憂さもわすれはてたる

など、うめき出つゝやすらふほどに、肥え太りたる若き男の身こゞえて、手足わなゝきつゝ瀧つぼより上りくるを、上にやすらへるがみて、たはふれて、盛りなる身の甲斐なさよ、かくては寒國の冬陣などには、物のように立つべくもおぼえず、といふ、かくいへる人をみれど、亦同じさまにわなゝきたり、をかしとて人々こぞりて笑ふ、かく打興じつゝ、やすらふに世の事も打忘れて、いつわくべうもおぼえず、日かげのやゝかたぶき行くに、つねはくれなむともおぼえつるを、かゝる夏しらぬ里にきぬれど、忘ましと惜まるゝもあやし、今はとて、

おちたぎつ瀧の白いとくりいでゝ
　わが家づとにせんよしもがな

歌會私式

なまがし

久堅の雲ゐの空はるかなる、畏きみあたりの御歌會には、むかしより、それ〴〵正しき式あれども、こは、なみ〳〵のきはの學ぶべきことならず。さりとて、心あるどち打ちつどひて、風雅のまねつきせむに、その式といふものなくて、みだりならむも、さすがに口をしけれど茲に、昔の人の、考へしるせる書どもによりて、歌會私式といふを掲ぐ。

歌の會には、あらかじめ、事を執る人を定めおくこと必要なり。その人々は、則、

判者

諸人の歌の善惡を評し、點ひきて撰ぶ人をいふ。

詠吟

兼題、當座の歌どもを讀みあぐる人をいふ。

公ざまには、これを講師といふなり。

助吟

詠吟者を助くる人をいふ。公ざまの讀師といふにあたる。

行事

故實などよくわきまへて、萬にまめやかなる人を撰ぶ。始より終まで、とにかくに會の事を沙汰する人なり。公ざまの奉行といふにあたる。

給仕

これは、末座の若き人ふたりみたりにて、事

とるべし。また、會の亭主の下部して、とらするもよし。

會の日は、あらかじめ定めおきて、行事より、當日寄りつどふ方々の方へ、兼題と共に案内しおくべし。人々は、兼題の歌讀みて、判者に見せて添削を乞ひおき、やがて、その日、會席へ持ちゆくべし。

兼題の歌は、懷紙にまたゝむべし。されど、短冊にとの契あれど、それにてもよし。

兼題をあないするに、飛鳥井家の古例には、御歌會には、同家より、兼題とて、兼日より、題字を短尺の頭にかきて、柳筥にすゑ、紙につゝみ、短尺の上を、黑白二色の水引にて結ひつけ、月並の連衆の人々へ贈る由あり。

懷紙の端づくゝには、春日同詠、秋夜同詠、あるは八月十五夜同詠など、必季同をかくべし。(季節と同詠との略なり)季同なきは無禮なり。短冊も通題ならど、題をかゝぬがよし。これらの座の貴人に、またかふ意なり。題かくは同じく無禮なり。

會の席には、床の上に、人麿、赤人または、貫之、躬恒なりとも、亭主のこのみに從ひて、神像をかけ、前に机をすゑて、供物どもそなへ、その前に文臺をおくべし。

追悼の會には、その人の影をかく。また月花のために、まうけたる會には、月花を上として、神像をかけぬこともあるべし。

會の當日には、契りたる時刻より、すこし早くゆき、次の間にまつべし。さて、その時になりて、

行事あないすれど、判者よりつぎ〳〵に、たちいづべし。

席の順序は、年齢によるべし。むかしは、官位ある人を上とし、次に武家、社家、儒家、醫家、出家、諸家と順序を定めたれど、今は用なし。

席さだまりて後、行事たちて、神影をおほひたる簾帳など掲げて、座中の人々に會釋すべし。その後、末座の人より、一人づゝ立ちて、影前にすゝみ、(都合により、上座より立つもよし、)懐紙を文臺に載せおきて、禮拜すべし。

懐紙は、巻たる端を手ひとつをかり、をりかけて、懐にいれて立つなり。さて、文臺の左の端の方にのせおくべし。初の人ののせたるは、右のかたへおくりて、その左におくなり。

事故ありて來ぬ人、または女房の懐紙は、文臺の下におくなり。また扇にのせて、右の方におく事も故實なり。

禮拜のさやうは、文臺の三尺をかりこなたより、左右左と、膝行してすゝみ、禮拜すみて、また左右左と、膝行して退くべし。

次に、行事いでゝ文臺をとりいれ、勝手の間にもちゆきて　詠吟者、助吟者と共に見て、順序をたて、(この時よみがたき文字あらば、その人にたゞしおくべし。)上輩を下に、下輩を上になるやうに、重ねて文臺にのせ、上に扇をおきて、持ちいで、よき所にすうべし。

かくて、助吟者、詠吟者と共に、立ちいでゝ座につくべし。助吟者、文臺の懐紙をとりて、わが左の方におき、一ひらづゝ文臺にのするを、詠吟者

よみあぐるなり。

詠吟が、誦すべきやうは、ゆるらかに、聲をひきて、おだやかに讀みあぐべし。このこと公ざまには、飛鳥井家、冷泉家など、各流義ありて、發聲の役は、講師のよみあぐる時、一首づゝ、甲乙、三重の次第にて、披講すなれど、こは普通の歌會などに、まねぶべきことならず。さて、よみやうの順序は、まづ、端づくり姓名をよみ、次に歌をよむべし。(おのが歌は聲ひくによむべし。)すべてこのあひだ、列座る人々は謹み聽くべし。

事をはりて、詠吟、助吟、もとの坐にかへりたる後、行事饗の事をもよほすべし。

饗のことは、もはら風流を旨として、わざらしき事、はでなる事を、さくべし。されどとて、あまりに、風流めきて、異そぎたるもわるし。田舎などにて、誰をあるじともなき、會などには、一種物とて、各さかな一種づゝ、持ちてよるも、古き例にもあることにて、興あることとなるべし。

當座の式は、行事題かきたる短尺を、もりたる硯蓋をとりて、卷頭、卷軸、よむべき人のまへに、持ちゆき、さて後もとの所へをくを、上座より一人づゝ立ちて、硯蓋の前に膝行して、左の手に短冊をとり、右にうつして、懐にいれ、神前へけしきして、たちかへるべし。

次に、給仕、硯箱をくばりて、後おのおの、たゝう紙に題字をしるしをきて、歌を案ずべし。

紙は上座より、次々へおくるべし。そを中を二

枚とりて、二枚ながらをりて、題と名とをかき、硯箱の下へ半いだして、おくなり。紙を折るに、疊膝などにおしあてゝ、折るべからず、さて紙を二枚とるは一枚には清書して、判者の評を乞はむが爲なり。

講はてゝ後、當座の歌よむ定ならば、行事よくよく席をあらためて、はじむべし。さらずとも、火鉢煙草盆、茶碗などの散亂したるは、こちたきものなり。

歌を案ずるには、靜にすべし。扇つかひ、立ちあるき、隣の人に談しかくるなどは、他のさまたげともなれば、心すべし。詞寄、類題集などくりひろげて見るは、初學の輩なりとも、わるし、已が歌とくできたりとて、みだりに題をとりて、讀むべからず。また人のさきに、會釋もなく、判者のまへに持ちゆくべからず。これらの事みな無禮のわざなり。

さて歌いできたれば、清書して、判者の評を乞ひ、後短冊にかき、行事に見す。これは假名づかひ、文字などの誤をたゞさむ爲なり。さて、短冊を三にをり、（初は題の處を下にしてをりこみたるを、こたびは上へして折るなり。）懐にして、一人づゝ神前の硯蓋の前にすゝみ、前のごとく膝行して、右の手にて短冊をとりいだし、左にうつして、硯蓋の向の角におくべし。次々は鳥の羽がさねに、おくが法なりといふ。

右の事どもをはりて後、行事いでゝ硯蓋をとりいれ、順序をとゝのふること、前のをりの如して、短尺をのべて、硯蓋にのせ持ちいでゝ、字本を影

前にむけて、さきに懷紙を誦したる時、文臺のありし處へおくべし。文臺には懷紙のせてわれど、こたびは硯蓋ながらによみわぐべし。助吟は硯蓋の左に坐し、詠吟は向に坐することはじめの如し。さて助吟左の手に短冊をかさねながらにとり、左に膝をたて、右の手にて短尺を一とほり繰返し見て、そのまゝ詠吟にわたす。詠吟も同じく膝を立てながら、兩手にうけとりて、そのまゝ詠吟す。まづ題次に名をよむなり。このたびは、つぎ〳〵によみたるを、下へ繰りかさねて、誦するなり。題の文字などは、いつも字音にてよむべからず。事終れど、助吟にわたして、膝をなはす。助吟とりて硯蓋におきもろともに、神前に禮拜して、詠吟より退くなり。

次に行事硯ぶたを影前に持ちゆきて、短尺をも文臺の懷紙の上におき、硯蓋を文臺の下にいれおきて、禮拜して退く。次に各ひとしく禮拜すべし。さて後、行事いでゝ神影をまきをさむべし。これにて事をはりたれど、各判者亭主へいはひ言のべて、會釋すべし。さて行事は、懷紙短尺をとぢて、裏書をすべし。その後に饗膳盃酒の事などありて、おの〳〵家にかへる。

饗膳をこゝにてするが定ならど、行事かねて用意してわるべし、たゞし、亭主の殊更にまねぎ企てし會ならど、亭主事とりて饗すべし。かゝる會には判者または事とりし人々にかづけ物などわるべし、

歌會の私式おほよろかくのごとし。

花ふゞき

塩井雨江

その二十一

御息所と賤機とは、賊の構へたる關所を避けむとして、反て、慮らざる天然の計りたる山路の嶮に遮ぎられ、路を失うて、思ふ方へ出づる事能はず。晝は、そこともわかぬ岩根を、うちのぼりうち下り、夜は、何ともわかぬ草を、まさつゑさつして、只管にあせれども、遂に道を得る能はず。御息所は、御心ばかりは、あくまで勇ましく、何ともなき氣色を、強てよそほひ給ふとすれど、流石に、御身は痛く疲れ給ひて、思ふやうならず。今は、頻りに歩みわづらひ給ふ御有樣の見ゆるに、賤機は、なほ露ばかり弱りはせじ、疲れはせじ、何處までも歩むべしとて、辭み給ふをも、強てすゝめて、かひ〴〵しくも背負ひ參らせ、獨り行くもむづかしげなる岩根を、更に難義とも思はず、事ともせず、岩にまれ荒金にまれ、貫き難き事やはあると、心も身體も、いよ〳〵矢の如くになりて、只管に、彼方を心懸けて進むとすれど、如何にせけむ、今日も又、路といふべき路に出でず。袖にかゝる白雲の間に、近く天つ日の沈むを見、踏みなやむ岩蔭に、ちかく尾の上の月の上るを見ぬ。」宿たのむべき家影は、此の二日三日、見たることなき程なり、且つは、宿るべき心なけれど、それ尋ねむとも思はず。なほ、月の光りのあかきのみを、せめてもの頼みとおぼえて、たどりゆくに、

御息所は、よく〳〵疲れ給ひけむ、いよ〳〵なやましげにて、賤機や、こゝらに水は無きか、一雫と求め給へど、いかにせむ、山路に入りたる初めの程は、清水も此處彼處に湧き、谷川も一條二條絶えず流るゝにわひたるが、山の高く成りてにや、此所わたりには、清水も湧き出る陰なく、谷川の流るゝ音もきこえず。

しばし待せ給へ、やがて候はむと、慰め奉りつゝ、なほ、幾岩根か越えゆけど、湧く清水もこぼるゝ雫もあらず。御息所は頻りに惱み給ふに、賤機は、側の苔むせる岩の上に、霎時姫を下ろし奉りて、勢はりまゐらすに、なほ水はあらぬかと、かゝるばかりの御氣色。あなや、天が下に數もあらぬ御榮華の御身に生れさせ給ひながら、一滴の水、御心にまかせたまはぬとは、如何ばかりなる不幸の御身におはすらむと思ふに、賤機は、悲しさかしこさに、覺えずこみあぐる涙に、胸も喉も塞がりて、御息所に縋りたるまゝ、霎時は物もえ云はず、山も月も靜りかへりて、唯折り〳〵、柔和しげなる春の夕の風に吹き連れて、笛の如く又琴の如き音の、たえ〴〵かすかにきこゆ。

賤機は、さとくもきゝとがめて、耳をすませど、何とも物の音は定め難し。されど、松風とはれば えざれば、もしや山人のすさぶにもあらむか、あらば、此の上なき便りなりと、思ひ頼みて、はや玉の緒の絶え給はむと思ふばかりなる御息所を、御心たしかに遊ばしてや、御心たしかにと、涙ながらに負ひ奉りて、物の音のきこゆる方を志して、

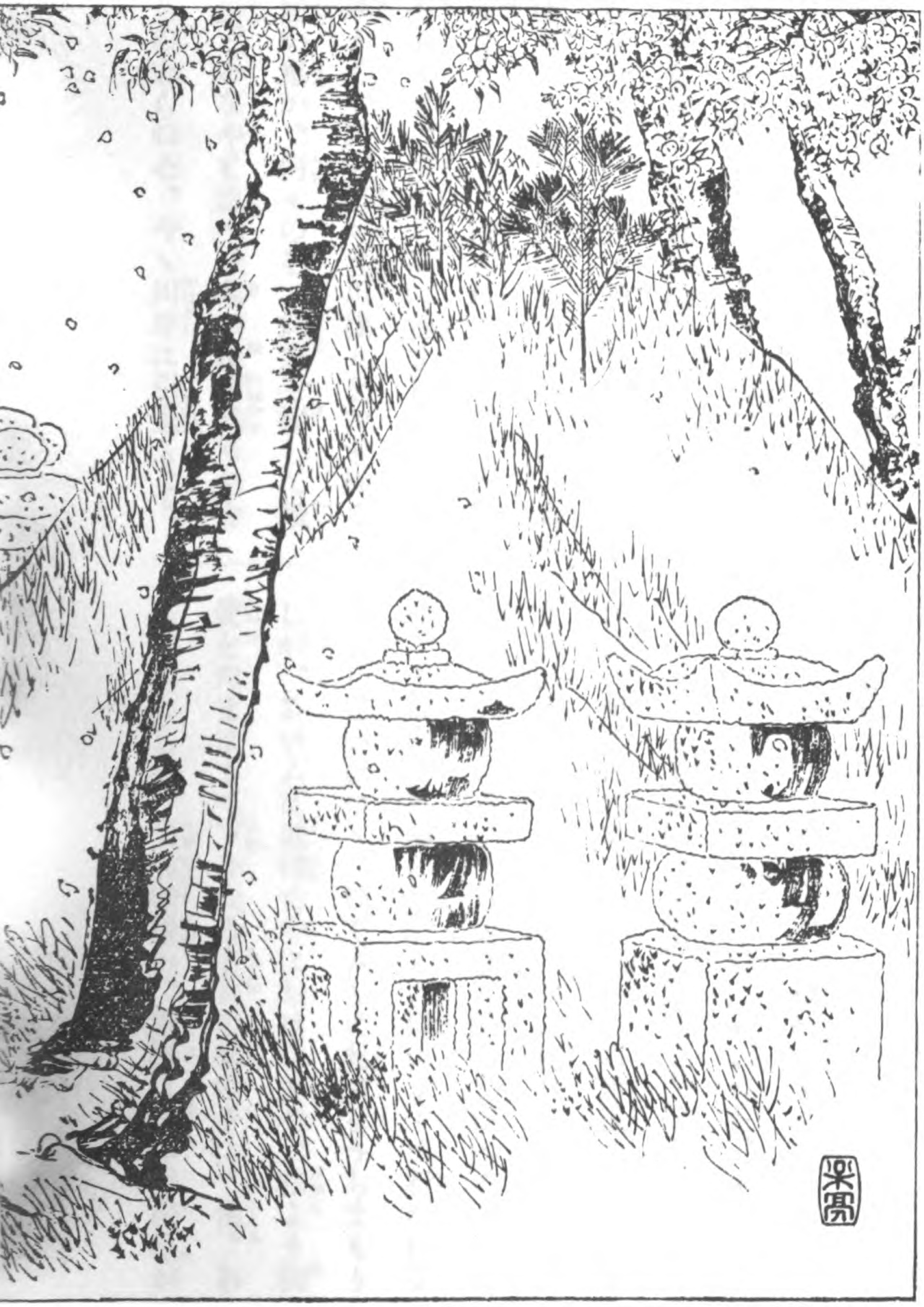
木の根となく、岩となく、心も空になりて、飛ぶがごとく、下り行けむ、琴笛の如き音は、何時しかきこえずなりて、まさしく潺々たる水聲の、高くきこゆるに、失望もし悦びもして、幾岩か馳け下りて、漸くさゝやかなる清水の流るゝわたりに出でたり。

玉と砕け玉と散る岩間の水をむすびあげて、御息所にまゐらせむとするに、悲しいかな、御息所は、いつしか絶え入り給ひけむ、御目も口も、固く閉ぢ給ひて、氣息もかよはせ給はねど、賎機は取り縋りて、呼べど泣けど、かへり給ふ氣色なきに、せむすべ知らず、唯、のう姫上〱と、よびては泣き、泣きては呼び、正躰もなく、遂に斯くなり給はむおん世ならむ、假令、仰には反きまつるとも、強て都に留め奉りけむものを、姫上よ、悲しや、姫上、のう姫上、姫上、何處へなりとも、おむ一人はまゐらせ申さじ。姫上、何處までも、御供奉許させ給へ、親らを、かゝる山に見捨て、何處へか、一人行き給ふ。つれなや、姫上。勿体なけれど、恨みに候、姫上、のう姫上、所詮なからむ御命なりとも、賎機がかばかりにして、辛くもたよりつきたる此の流れの水、切めて一雫はむすび給ひての後に、兎も角もならせ給ひてよ、姫上、のう姫上、のう姫上、のうといふ言葉さへも、定めなく、かき亂れに亂れて、頻りに掬べる水を、御顔にそゝぎかけ、聲を限りに、よばりよばはる志の、纔に通よひけむ、甲斐なかりける御息所は、かすかに御目を開き給ひて、賎機か、此所は

何所ぞと仰せ給ひ、又やゝありて、金ヶ崎はまだ見ゑずや、賤機、いたい苦勞かけてやと仰せて、うれしや御氣を丈夫に姫上よとばかり、泣き伏したる賤機を、力なき手にかひなで給ふ。

御息所の蘇生りたまへる嬉れしさに、日來の勇氣、なほ一層の勇氣を加へたる賤機は、月の光りに、あたりをうちわたすに、流れに沿ひて、一條の路あるごとくに見ゆるに、如何にしてまれ、金ヶ崎を見では、止まじ仆れじ。道あれど、何處にまれ、行かれぬ所やあると、決心とみに勇ましく、又御息所を負ひ奉りて、四五町も谷川縁りをたどれる折りから、熊か鬼か、何ものぞ、此方を指して駈け來る黑き影。あなやと思へど木の根岩角もあやにく隱くすものあらねど、やゝ川岸に引退りて、咄嗟の間に、右手を短刀にかけて、身構すれど、彼方も俄に驚きたる氣色にて、踏み止まり、暫時此方を窺ふごとし。

彼は、長くはためらはず。づか／＼と寄り來るを見れど、鬼にもあらず、熊にもあらず、正しく人なり。人と見るに、盲龜の浮木にあへる心地して、善惡如何なる者なるかを定むるの猶豫もせず、能き所にあひ奉るものかな、路に迷ひて難義仕る。金ヶ崎へまゐるべき方を敎へ給へといへど、彼方は、ろは嘸や難義の事、この道によりて行かれなどよしといひつゝ、つく／＼と此方をうちまもりしが、さいふは賤機どのにおはさずや、京より御使をたまはりて下りたる有井の家の子にて候。あな、うれしや、矢兵衛殿か、賤機に侍る。御邊が





賜りたる御使、久しく金ヶ崎のたよりもきこえず。都の方も、心元なく成りまされど、兎も角も、御一所にと思ひ立ち、御息所の御伴して、覺束なくも志してまゐれるに、此の山に、慮らず路を失ひ、今日にて三日三夜、糧は、聊かなれど構へたれど、餓ゑかゝりの苦しみを免れたるも、岩をさき岩を淩ぎ終日終夜の山路に、心ならずも、痛く腦ませまゐらせたる不甲斐なさよと、大方を物語れど、御息所も、矢兵衛が、機賤が赤心一つに助けられて、これ迄參りたり。其方は、今日まで、金ヶ崎に在りてか、宮は如何にかましまし給ふと、あるか無きかの御聲にて、かすかにのたまふ。

矢兵衛はかしこまりて、宮は御障も候はず、合戰に御指圖あらせられ候。私御使を賜りて、京を罷出でゝより、日ならぬに、金ヶ崎へは參り候處、折りしも、御城下にて非常の激戰、彼我亂軍にうち紛れて、難なく城中に入り、久々にて主人にも對面仕り、宮にも拜顏奉り、たん使の趣をも啓し奉り候處、細々なる御言葉をも賜はられ候故、急ぎ歸りまうでむと思ひ候ひしが、日となく夜となく、四面より隙なき敵の攻撃、一矢にても、矢數の多きを頼む時に候へど、明日とといひ、明後日といひ、思はずも、今日まで、御城門に防矢仕りて候處、所詮小勢にて覺束なけれど、杣山より疾く加勢を出すべき催促の御使をたまはりて、同行三人、今日黄昏にまぎれて、城を忍び出で候ひしが、はしなくも敵に咎められ、二人の者は、やゝ老武者故、踏みとゞまりて、此

處を最期の血戰すべけれど、それがしに使命を果すべき由の火急の頼み、是否をいふべきにあらねど、其のまゝ落ち延び候て、わざと山路を取り、是れ迄、唯今參りたる事に候と、物語りて、又賤機をかへりみ、さすれど、所詮尋常にては城中に入らむ事、至極の難義なり。矢兵衛が、これより直に御身を助けて、共におん供せまほしく思ひ候へど、させる火急の使なれど、一刻も遲れ難し、殊に、姫上も、いたう煩はしげにおはせど、余よき計あり、まづそれがしに從ひ來たまへと、主從をすゝめ、なほ四五町も元へ引返し、岩ほを傳ひて、向ひなる山につき、又羊腸たる山路を、上りつ下りつするに、十町あまりにて、さゝやかなる杉の板屋あるを、叩きもせで、内に入り、軈て主人と覺ぼしき老人と共に、主從を出迎へ、こは此の頭宮の御所に仕へ奉れる女子の父なり、矢兵衞が首にかけて、決して怪しき者に候はねど、此の處にて、わが歸り來ん日を待ち給ひつゝ、長途の疲れをも休め給へと、二日三日が程のみなれどといふ。矢兵衛の赤心は、土佐より知れり。主人なりといふ翁も、面ざし言葉づき、まめやかげなる者なれど、賤機も更に疑はず、其意見に從ひて、此處に御息所のおん疲れをいたはりつゝ、矢兵衛のかへりを待つことゝせり。

されど、如何にしけむ、矢兵衛は、契りたる二日三日は、既にすぎ、五日六日もいつか、七日となれるに、歸り來ず。音信なし。御息所のいたづきは、なほ思ふやう快くおはさねど、賤機は、なほ

斯くてもと思へど、矢兵衛が語れるによりて思へど、金ヶ崎の摸様も、いとゞ心許なし。殊に、御息所の彼の方のみながめ給ふ事のいとはしけれど、賤機は、御息所に啓して、瞬時の暇をたまはり、主人の翁にも謀りて、單身金ヶ崎の安否を知らむと志して、立ち出でたるが、何となう胸のさやぐに、再び走りかへりて、かへすぐ〱姫に御心安くおはさむ事を祈りきこえ、翁には又呉々姫の上を頼みきこゆれど、搆へて案じなせそと姫の一言、慥にうけひき申したり余わるからはと翁の二言、今はうしろやすくや思ふらむ、さらど、やがて吉報をと、莞爾と笑顔をとゞめて、走り出で、翁に敎へられたる間道を、頻りに走りたる程に、日暮はどに、峯の絶頂に出でたり。ほつと一息して、岩根に腰を下ろし、金ヶ崎なりといふ方を、遙にうちわたす折りしも、彼方に遠く、ぱつと燃えあがる火焰、むら〱と立ちのぼる黒烟、あなやと思ふまもあらせず、火はいよ〱熾に、天も焦げむと見ゆ。

失火か落城か、無念と一蹴り岩ほを蹴かへして、走ると見えたるが、翅鳥か奔雲か、幾里の山路、宙を飛ぶがごとく、駈りに駈りて、いよ〱近づけど、天地に轟く鬨の聲、山河を動す鼓の音、まさしく落城とおぼえたり。遲かりき、殘念、無念と、身を振はして、猛り立てど、一陣の疾風、山を下すばかりの勢、道にあたるものは、馬となく、人となく、楯となく、劍となく、うち仆し、斫り仆し、城門近くちかよれど、はや一の木戸も、二

の木戸も、打ち破ぶれて、敵味方入り亂れて、奮戰、三の木戸も、はや守る人なく、唯暴虎と猛り馮河と狂ひたるに猛將は、忘れもやらぬ三郎と七郞となり。賤機は、ひし／＼となりて競ひかゝる寄手の一隊を、嫉くさも嫉くしと、背後より、散散になぎ仆し、踏み越ゑ、七郎と今しも槍を合さむとしたる一將を、馬諸共突き仆したる上を、一ふみ二ふみ三ふみ踏みにじりて、三の木戸に躍り入り、七郎殿、久しや、宮の御坐所は何處ぞと問へど、彼方も佶と見て、賤機どのか、珍らしや、さても、無念、宮は彼方、折りよや賤機どの、宮へ一言、七郎が最期の御暇乞ひ、御逆に預けまつる。慥に預り候、七郎殿、隨分はな／＼しくといひ捨てゝ、火の中煙の中を潛りて、近づく宮の御坐所、宮は、はや御覺期のさまにて、二三の大將と、共に靜に坐し給へるが、眼早く賤機を見させられ、賤機か、泣くな、云ふなと、唯おん一言、血にまみれたる肌衣を取り給ひて、これは堀河を出でたる時よりの肌衣、血に汚れたれど、今よりはおれぞ。捨てなせそ、賴むぞやと、僅かなれど、千万無慮の心は籠る形見。賤機は受け戴きて、うけ給はりぬと、一言ばかりは氣丈にいへども、天とも神とも思ひたる宮、これが限りのおん言葉や、これを最期の御笑顏かと思へど、胸も腸も五臟六腑も、きれ／＼になるばかりの悲しさ。泣かじとすれど、涙はこらへず。ひれ伏したるまゝ、泣きしづめる姿を、宮はつく／＼と見そなはして、同じく心にや泣き給ふらむ、暫時は言葉もなくて

おはせしが、三の木戸も、はや破ぶれたりとれば
しく、わめきさけぶ人馬の聲、間近くきこゆるに、
賤機、はやう、危し、疾くと、促し給ふ間もなく、
敵四五十人、どよ〳〵と押し寄せたり。味方は大
方打死して、はや進み戰ふ者もあらねど、賤機は
むつくとはね起き、例の短刀をうちふり〳〵、一
歩も寄せじと、縦横無盡、烈火のごとく恚りての
奮闘、かばかりの烈女が、絶望の城に臨みての激
戰なれど、物凄きまでに烈しき尖光、忽ち仆るゝ
者二三十人、自身も痛手二ケ所ばかり負ひたれど、
撓まず屈せず、半時あまりも防戰すれど、宮も既
に御生害ありし樣子、いでこれまでなり、犬猫ど
とき奴原に、御首わたすべき事かはと、又内に走
り入りて、許させ給へと一聲、御首をうけ戴き

て、形見のおん肌衣にかい包み、懐に確かと入る
るまも、やらじ逃さじと、隙間なくうち込む刄の
下をかい潜りて、前に進める大將株の首、横なぐ
りに斬りはらひて、左手にうけとめ、犬猫めが、も
のほしくば、此れ喰へと、群がる敵の中へ、ゑい
とばかり投げ込みて、いよ〳〵寄せあふ重圍の間
を、前後左右に、なぎ仆し、斬り仆し、辛うじて
城を二三町落ち延びたる所に、年若き女子が、敵
に取り圍まれての苦戰、おのれといひさま、馳せ
よりて、五六人を一なぐりに、二度三度斬りなぐ
りて、血路を開き遣れど、彼方の女子は、嬉しげ
に目禮して、おなじ山路へ 志すやうなれど、賤
機は、其まゝに後をも見ず、脇をも見ず、幾里の
山路を、夢中に走り越え、御息所をとゞめたる翁

の小屋の門、姫上よと、一聲よびたるまゝ、どつとうち仆れて、又立ず。をしや、これを限り又見る事叶はずなれる赤心の花一枝、延元二年春のくれ、これが故にぞ、怨みは多かりける。

やがて、紫野のほとりなる名高き御寺に、新に築きあげたる塚二ッ並べたる脊後には、やゝ引き退りて、小さき塚二ッ、紛々たる落花頻りに恨みを盡くして、鳥の鳴く音獨り急なり。（大尾）

可憐孃

中尾鶯夢

（三）村落の花嫁　中

さる程に、神佛祈護の應驗にやありけん、又過世の冥福にやよりけん、愛出度女兒の出生せしかた、夫婦の喜悦、何に譬へん方もなく、況いてその兒の端正なること、春の曙霞に匂ふ櫻、秋の黄昏風を傷む菊の如かりしかば、名さへ常花と稱びて、百歳の後までも、其の面影のかはらじと希ひ、塵にも据ゑず風にもあてゝ、蝶よ花よと片時も、心の緩慢些も無く、夢に寤に子を思ふ、なべての親の心も疎なれや、世の歡樂、これに勝るものあらじと、只管心を凝めて養育みつゝ、他愛な氣に、早三年を過しぬ。

唯美はしき眼を瞬き、愛くるしき豊頬に、無限の微笑を湛へ、饑ゑて叫ぶの外は、清淨無垢なる、佛の姿を舍せし常花も、やすく〳〵眠りし春の曉、目醒めて謳ふ鳥の音に、無意識に咲ひ喜び、夕顔棚の下納涼、母の膝に居ながら、蚊遣の烟に咽びし夏の夕、媬姆の脊に秋の山、落つる木の葉に駭き泣き、あるは、霜白く風激しき冬の夜寒に、母の乳房探りし閨帳の裡等、數重なり踰ゐては、憎

きまでに肉肥りて、骨無げなる双脚に、力を含みて、腹匍ひては轉ぶ千鳥足、垂涎の滑かに潤ひて、花の蕾の露を宿しし唇端を、搖動かし始めては、なか〱に、鵙の囀聲も可愛らしき、頃ところはなりけれ。

寔に人のこの世にあるは、炊煙一醉、夢の間に假の宿りぞかし。されど、蜉蝣の夕を俟たず、朝顔の露の干ぬ間の命、あはれにも果敢なけれど、世に善根を積み、聊かの餘慶は、見ゆる子寶を得しかど、行末先途も見屆けで、無慘にも大吉、如何なる前世の應報か、一旦中風の病蓐に臥し、藥餌もろの効驗薄く、志だいに枯槁悴憔なして、かたみに通ふ呼吸の音苦し氣に、妻のお菊を枕頭に、招きて、熱き涙を重き枕に灑ぎつゝ、常花を見遣りて、瞬もせざりしが、われかくも重き病に惱みて、そなたに苦勞をかくること、言葉に謚くす謝辭もなし、とてもかくても、こたびは助るべうも覺えず、今更に思ひ殘すことなけれど、わが逝き跡は、必ず常花を養育みて、立派なる花婿を迎へ、家名を相續せさせ呉れよ、と言ふさへ朦朧にて、蟲の音のきれ〲に、其の日の暮昏ころ、あへなく息は絶えにける。

鶯夢いふ。われ去ぬる月より、恙ありて、風淸く月白き、築地の濱に病を養ひしが、醫師の警嚴しくて、操觚の業を禁められつゝも、責を怖れて、村落の花嫁の斷片をものしつ、こたびもろの意を謚さゞるまゝ、「中」と假定めて、いま一回をものして、(四)にうつることゝしぬ。讀むきみ、許しねかし。

文林

泉避暑　高崎正風

衣手のさむくなるまですゞめども
清水がもとはたちうかりけり

水邊撫子　諏訪忠元

いけみづに影はうつれど立よりて
折よしもなきなでしこのはな

閨扇　小出粲

ふしながらつかふ扇のかせゆれて
なみよるかやのかげぞ涼しき

螢入簾　遠山英一

をすの内にいりしはたるよ燈火を
ふきけつ風やさそひきつらん

蓬園伯の茶室にて　坂正臣

松かぜにうきよの塵をはらはせて
こゝろの月やいかにすむらん

月前蚊遣　曲澤貞恒

蚊やり火の空にひとすぢ立のぼる
けぶりにかすむゆふ月のかげ

日章旗　近衛光子

大御代のひかりもそひて天津日の
み旗は四面にかゞやきにけり

御先代齋彬君の日章旗を創製し給ひしを畏みて　島津楫子

立そめし君がいさをはあまつ日の
み旗とゝもにあらはれにけり

湊夕立　仝

ふねよする袖のみなとの夕だちに

ぬれぬたもとも涼しかりけり

水邊夏月　税所敦子

おとたかりきくも涼しきやり水に
かげころみゆれなつのよの月

雨中郭公　諏訪晴子

つれ〴〵と夜も静かなる五月雨に
聲ふりはへてなくほとゝぎす

窓前螢　遠山稻子

ともし火は風にけたれて窓のとに
さすはほたるのひかり也けり

雨後蟬　三輪貞信子

降りたらぬ雨のおとよりなく蟬の
こゑに暑さぞいやまさりける

夏月涼　内田ゆか子

板びさしあれたるまゝに月かげの
もりて涼しきなつのよはかな

螢　松原ゆき子

草の葉にやどれる露と見しほどに
おほぞら高くとぶほたるかな

納涼　彦坂尊子

村さめのなごりの露にをすまきて
ゆふ月すゞしやまもとのいほ

野夕立　仝

立ちよりて笠宿りせんかげもなし
ふる野の小野の夕だちのあめ

納涼　今様體に倣ひて[illegible]首　三輪義方

磯打浪のさやけさに　忘れし暑さも忘貝

葉末の露の涼しさに　待たるゝ秋も忘草」
今戸の西に日は落ちて　空さへ澄て墨田川
いざよふ月の影共に　涼しさ浮ぶ波の上」

扇

坂　正臣

かざせど照る日も　わつからず
動けむ風も吹出でゝ　科戸の神とも云つべし
夏執る物の何はあれど　扇に優やなかるまし

親しき友にわかるゝ時よめる

高田昌延

けふよりは、うみやま遠く、へだつとも、へだてぬ友の、こゝろもて、文かよはさん、なく鳥の、まなくひまなく、音づれて、なはかたらはむ、それもはた、樂しからずや、けふのこの、をしきわかれは、かなしかれども、

心といふことをよめる歌

海上壽子

眞かゞやく、金はあれど、光りある、玉はあれど、も、玉はも、いつかくだけん、金はも、いつかつきなむ、そこもへど、何にかはせむ、つきもせず、くだけもせずて、劍太刀、身にそふものは、むらぎもの、心なりけり、心だに、さかしくあらど、まつろはぬ、國をことむけ、千萬の、人をなびかし、天の下、しらしゝ例、古に、ありと聞つる、心ころ、金にまされ、心ころ、玉にもまされ、しかむかり、たふとかりけり、そをおきて、他寳を、何かもとめむ、

暗夜すゞみに行く

林　甕臣

夕暗の蒸し暑さに、風おひて門のべに出でたるに、心知りの友、訪ひ來て「いざ納涼みに、」とて、切に誘ふ。闇紛れの憚る所無く帑布の素帷子一つに三尺手拭せし儘の「あまりも、在るかな。」とて、妻孥の、言へど「衣着更へなどせんは、暑きに、」と苦み、「人の見るは、ものかは。」とて、杖のみ取り出さしめて、打ち連れ立ちぬ。

螢、みだれ飛ぶ野川の風色、言ひしらず涼し、扇もて、さし招くに、知らぬ顏つくりて、あらぬ方ざまに煌めき逸るゝ、心憎しや。

燃ゆばかり思ひは胸を焦がせども
　　鳴かぬ螢を心ともがな

と、打ち誦じたるに、友、あなづり咎めて、「日頃の心構へに似ずも在るかな。」とて、頰笑みつゝ

淺ましな君がこゝろも暗を世と
　　尻の光りに媚ぶる螢を

と、強にもどく、折りしも、螢、吾が方ざまに飛び惑ひて、袖の中に入りぬ。情有りげなるも、可笑し。細目の透きたる袂、然ながら螢籠めきたるを「なほ捕りためん。」とて、口括りて、草の蔓して、引き結ひつ。然ころ、異やうなりつらめ。行きちがふ人、笑ふ。

斯くて、流れに、のぞめる篠すだれの軒に入れば、老嫗、走り出でゝ片訛りの「ちやはや。」茶もて出でたる娘の、居立ちふるまひ、品無きも、所から似つかはしう、なか〳〵に、つぎ〳〵し。醉ひで

こち、唯ならぬに、庭に下り立ちつるを、蘆垣隔てたる隣の家に筬の音喧し。洋燈の火影涼しう庭でしに見とほさる。年齢は、十八九にもや。頬ゆたかに色いみじう白く肥ねふとりて、乳房ふくらかに、肌、脱ぎすてたるが、機織るなりけり。「斯う暑きに、日暮れにたるまで、能くもころ。」とて、すゞろに心感きて、涙さしぐみぬ。「家のしつらひざま、卑しからず。遣り水、築き山の立たずまひ、由ありて、見ゆるは、貧しき際には、非ざめるを。」と、東京わたりの女學生どもが、とかく、遊藝三昧にのみ、ざれむむに對しては、父兄の心おきてをさへ、叉無く思ひ比べらる。心知り、「れいの」、と、淺み打ち笑ひ、言ひ消ちて「あの琴の音聞きたまへや。」と、およびさすを、打ち見やれど、川の向ふ岸に小やかなる伏せ屋の竹の網戸排へなしたるなりけり。嘲り憎みつゝも、さすがにて、しぶ〳〵も、彼の後に立ち、丸木橋渡りて、垣まむ。火影際異に、きら〳〵しく、搔い弄る手つき痩々として、貌だち氣高く眉のわたり打ちけぶれる匂ひ、似る者無し。聲さへ殊に、うるはしう色ふくみて、彈き澄ましたり。松吹く岸の川風に通ひて、響きあひたる、あなたの筬の機おと、比ぶべくも、あらずかし。

痴なるは心なりけり心にも
　まかせぬものは心なりけり

とて、心の外に、時移したるも、恥かしな。さて、家路は、月に送られて、」と、心筭ひてしに、空ふけゆくまゝに、いとゞ暗に打ち曇りぬ。

いたづらがいたづらならず成りにけり
　細目の袂袖のほたる火

雜報

●被害地御救恤金の下賜　去月下旬以來、各地方非常の暴風雨にて、被害尠からざりしを以て、畏も　天皇皇后兩陛下は、之を憫然に思召され、去十六日御救恤として、福岡鹿兒島兩縣下へ、金二千五百圓、熊本福井兩縣下へ、金二千圓、長崎縣下へ五百圓、佐賀岐阜兩縣下へ、同金千圓、滋賀縣下へ、金五百圓を下賜せられたり。

●俘虜天恩に泣く　廣島陸軍備豫病院に入院中なる俘虜、直隷省大明府開城州城厘、拱衛營步兵卒劉福安(二十五)奉天府海城縣昌雨泡、倜開府前軍右營船廠步兵卒馮萬海(二十七)安徽省雍州府博州城、准軍懷字營步兵卒蔣玉發(二十九)直隷省寛城子倜開前軍右營步兵卒王貴(二十四)は嚮に清軍に服務中、凍傷に罹りたる者にて、孰れもとらはれて、我國に來り、鄭重なる手術を受け、劉は右脚、馮は左脚、蔣は兩脚、王は右脚を切斷せられしが、頃者傷部全く平癒したれど、去七日病院手術室に於て、各自へ恩賜の義脚を下賜せられたり、當日院長草刈義哉氏は、俘虜一同を室内に据坐せしめ、『我仁慈なる　皇后陛下は、你等の負傷して不具に陷りたることを聞食召されて、今此義脚を賜はせるなり、你等我　皇后陛下の優渥なる天恩を感銘して義脚を拜戴せよ』と訓諭しければ、俘虜一同叩頭して天恩の忝さを拜謝し、夫れより田中軍醫は義脚の使用と、其保存方法等を、懇ろに告げ、各自に義脚を當てはめさせたるに、馮萬海の如き巧

に運用して、庭内の散歩を試み、右なる杖を放ちて專ら義脚により、歩調を驗するなど其顏色如何にも嬉しげに見えたりといへり。

●造花の御注文　一橋なる女子職業學校にては、さきごろ宮内省より桔梗、蝦夷菊、撫子等の、つくりもの丶、御注文を受けしかど、目下專ら調製中なりといふ。

●女子職業學校の祝宴　本年京都博覽會に織物圖案を、出品しつるに、有功一等賞を得たれぞとて、近日その祝宴を開くべしと云ふ。

●貴夫人の美擧　土方子爵夫人龜子、三島子爵夫人和歌子、西鄉伯爵夫人清子、大山伯爵夫人捨松、樺山子爵夫人幾茂子の貴夫人たちは今回征淸軍に從ひたる、軍人軍屬の未亡人にして、能く婦道を守り、貞操節義の實ある向には、土方夫人より、曾て　皇后陛下に奏請の上、御物（御手製繃帶絲屑）下賜の榮を得、之を原料として、岩代の瓜生岩子の意匠に成れる紀念織一反宛を贈りて、追悼の情を致し、且其夫の從軍中に戰病死せる事蹟を輯錄せる冊子を頒たんとの企てをなし、頃日各府縣知事へ宛て、其趣意書を郵寄し、一般の調査方等、依賴せられつるが、兵庫縣知事は、既に各郡市長に照會せりといふ。

●軍人慰勞會募集金決算の報告　有栖川宮妃殿下を始め、各宮妃殿下の御勸誘によりて、昨年八月一日このかた全國各府縣の令夫人、令孃方より、募集せし、遣外陸海軍人慰勞金は、其の都度必要の物品を購ひて、贈與せられたりつるが、今其の

收支決算報告をしたれど、其の要領をかゝげぬ。

収入の部

金千五百圓　皇太后陛下御下賜
金千七百圓　各宮妃殿下御寄贈
金四万二千七百五十四圓六十八錢三厘　全國一般よりの寄贈
金四百五十六圓八十七錢　明治廿七年八月五日より同十二月卅一日までの利子
金四百九十四圓七十四錢一厘　明治二十八年一月一日より六月廿五日までの利子
合計四万六千九百〇六圓廿九錢四厘

支出の部

金四万六千七百廿四圓九十三錢七厘　慰勞物品費

內譯（略す）

差引殘金百八十一圓三十五錢七厘は外征軍隊死亡者遺族慰問婦人會へ寄贈せしといふ。

●細民救濟會　福岡縣にては、舊藩主黑田侯、率先して立案し、同縣出身の有力家は一同之に贊成して、細民救濟會、といふをおこせり、其の旨は縣下の細民を救濟せんため、一定の職業を與へんとするにあり、其の要領をかゝぐれど、

◎目的　福岡市の細民、特に無職業なる婦女子を勸誘して、職業に就かしむるに在り。

◎方法　會社の資本を二万圓とし、發起者に於て、過半の資本を引受け、殘餘の資本は、之を篤志者に引受けしめ、會社の事業を織物業と爲し、幾多の婦女子を雇て、同業に就かしむるに在り。

世渡るたつきもしらぬ細民の、盲龜の浮木におへる心地もして、いかにうれしからん、いかによき企ならずや、

●隻脚兵士の祝宴　淺草茅町の松島金太郎といへる人は、去年旅順口椅子山の砲臺を攻擊せし際、負傷して爾來豫備病院にて、三たびまで切斷術を行ひて、終に隻脚を失ひたる人なるが、去十三日知己八十餘人を柳橋なる柳光亭に招きて、宴を張

れり、その席上に陳列したる、名譽なる品々、

皇后陛下下賜の義足○兵士の義手足を　皇后陛下の天覧に供したる寫眞蜻蛉の模様ある松浦伯爵よりの木盃○淺草有志よりの賞狀銀盃○東京府廳より受けたる桐の紋ある木盃○淺草藥業組合よりの金指輪○町内有志よりの銀時計○淺草區民よりの感謝狀○歩兵三聯隊よりの木盃其他

●女子高等師範學校補欠入學　ことし三月の定期入學には、定員よりも少かりしが上に、五月の假入學より、本入學にうつししときも、不合格者ありしかど、去七月に補欠生を募れりしに、二十一名のうちにて合格せしもの、石井くま子、外に五名のみなりしといふ、定期入學者は、府縣の推撰によるものにて、試驗學科は、日本歷史、漢文、算術、國語の、四科なり。さるを補欠生は、尋常師範學校女子部第二年級修業以上の學力を程度にして、全科を試驗すなりといふ。かくて心得べきあらましを、きゝおつるがまゝに記さんに、日本歷史は最もくはしかるべく、されどもたゞ章句の諳記などはいさゝかも益なかるべし。文物、制度などの邦家の治亂興敗に影響せることがらなどは、中にも心すべきこととなるべし。漢文は多くは小學、論語などの經書を見、國文は土佐日記、いざよひ日記、つれ／＼草、などなるべし、たゞ文意を解すべきのみならず、文典もよく／＼、見るべきわざなり。算術は全体をよく心得べきはさることなるべけれども、四則應用、分數、小數、比例、などはことにくはしかるべきなり。難問の例題などはするには及まじ、平易なる數理をくはしく心得たるべし、習字は楷、行、草、三体をよくすべし。ことに假名体なども。体格。はたとひ

これといふ病はなきも、軟弱なるはとらず、いと嚴重なりときく、こたびの試驗問題は、

日本歷史。

神代に於ける開化の概略、

曾我、物部二氏の軋轢は、單に佛敎に基くや、否か、

國　文。

國語の性質、及び其形体上につきて、大別せよ、

動詞の命令辭となりて顯るゝときの有樣、

かとぞの意義並に其用方、

算　術。

分數を一見して、循環小數なりや、否かを知る場合及び其理由、

分數除法につきて、其方法並に理由、

習　字。

楷、行、草、三体、歌一首をかな体に、

圖　畫。

鉛筆畫、書籍

毛筆畫、草木（隨意相像）

裁　縫。

一丈八尺をもて、女服の鍵たちの積り方、

七分の裾（實地運針）

こは後の志望者の便りにもとて要とあるべきを、かいつみて、記しつるなり、みなはわづらはしけれどはぶきつ。

●奇論　新刊の東京經濟雜誌（第三十二卷第七百八十七號）の論說欄に『日本皇族の姬君と朝鮮國皇子義和宮殿下との結婚を望む』と題する一の論說をかゝげたり。曰く、

若し我　今上陛下の保たせ給へる宮々の御中に就て御歳の長じさせ給へる女宮のおはさんには余は猶豫なく其　宮樣とを奏議もしつらんなれども、如何にせん今は去る御方の見ねねど皇族

の姫君の御中に於てと申すなり、………多くある皇族方の姫君の御中に於て才色兼備にして御年も程良く長させ給ひ、而して自ら奮て朝鮮國に赴き義和宮殿下を助けまいらせて彼の國家の危運を挽回して見んとの氣慨を有し給へる健氣の姫君一人たはさゞるあらんや、………此媒酌人は井上翁及び其老夫人ならざるべからず。…
近代の一奇論「よしあしは見ん人の心にまかせん。

●地理知らぬ旅人　歌人は居ながら、名所を知ると云ふ諺あり。さるを、今の歌人は、旅すれど、地理も知らねど、名所も知らぬもの多かるにや。さき頃日本新聞に旅の記、載すべしと、ことくしく前觸し、さし載せたる紀行を見れど、國府津にて、別るゝ時よみたり、と云ふ歌あり。其の歌に、「ふたゝびはあふとおもへど箱根川ゆきわかるゝはかなしかりけり」國府津より箱根には程遠し、又箱根川と云ふは、其のあたりになき川なり。源平時代頃に名高かりし、酒勾川をこそよむべけれ、「箱根山にかゝれど云々」とあるも、滊車は根箱山よりは、遥に北の方なる足柄山を通ほるなり、又「伊吹山にわけのぼりて近江に出づれど日枝の山の夕日云々」と書きたれど、やはり滊車は伊吹山よりは、遥に南の方にてかの阿佛尼が「我が子ども君に仕へん爲ならでわたらましやは關の藤川」など詠み、關白藤公の藤川の記などありて、其の名も高き藤川と云ふ地名の處を、こせるなり。これは、燒津を過ぎて云々」とて、日本武尊の御故事いひたる文に、對して、恕すべきも、日枝の山は湖よりは、西南にある山にて、とても彦根以北の岸よりは、見えざる地勢なり。かゝる人を

しも、世に地理知らぬ旅人とは云ふなり。

●受賞者　東京市小石川區小石川大塚窪町
篠　きよ
五十二年

幼にして孝順、常に傭作、以て、衣食の資を助け、長して總次郎に嫁し、克く其姑に事ふ、姑幾許もなくして死し、夫亦次て病み、不幸頻りに踵り、家計窮厄に陷るも、躬能く艱苦に耐へ、晨に耕耘に出て、夕に病床に侍し、志操の堅貞看護の懇到、二十余年一日の如し、夫沒して寡居、節を守り、祭祀之れに事ふること、猶生前に事ふるが如し、且兩親尚在り、傭賃皆之に奉し、承歡の狀、其家に在るの時と異なる事なし、洵に奇特とす、依て其賞として金五圓下賜す、

明治廿八年八月一日　東京府知事　三浦　安

●臺灣の順良婦人の率先者

臺灣は、既に日本の版圖なり、而して、其の住民は、皆日本の臣民たるべき者なり。然るに、久しく蠻夷の下に在りて、なほ我至尊の御仁德を知らず、我日本國の美風を知らず、我王師にむかひて、頑陋なる抵抗を爲す者あるか中に、あはれにも忠良なる一老婆出でたり。そは、去月二十四日の國民新聞の記事に、我軍隊に功勞ありし一老婆として、

去る六月七日、近衛第一聯隊、第一大隊が、臺北城を占領せし當時、一老農婦のありて、我が軍隊の爲めに殊勝の手柄をなせし、一事は、頑迷不遜なる臺灣土人の舉動として、珍且つ奇特とするに足らん、今其摸樣を記せむ、當時我が軍の臺北城に迫るや、各隊皆銃裝突貫を以て、此門に迫りたり、然るに門扉堅く閉ざして、容易に開くべき工風なきのみならず、城壁さへも彌高くして、攀登る事能はず、殆ど其計の出づる處を知らざる折柄、一個の老農婦の來るものあり、彼れは忽然何處より持ち來りけん、一丈有

餘の竹梯子を携へ、壁上に立ちつゝ、怪しき手眞似を爲して、我が軍隊をさし、招きつゝ、其梯子を群集の間に垂下せり、其れと見るより、一同は是れ幸と、先を爭ひて懸け登る、其間老婆は梯子の頭を堅乎と捕へ、必死となりて、我が兵卒の壁上に登るを盡力せり、大勢既に此の如し、斯くと見て、敵兵共は最早叶はじと思ひけん、狼狽周章しつゝ、遂に我れより門扉を開きて、降參したりしとぞ、斯くて戰終るや、我が師團長殿下には、頗る奇特に思召され、彼の働きを嘉賞遊ばされたる賞詞に、若干の金員を添へて、賜はりたり。

賞賜奬衆

臺北府北門外農婦　陳　法

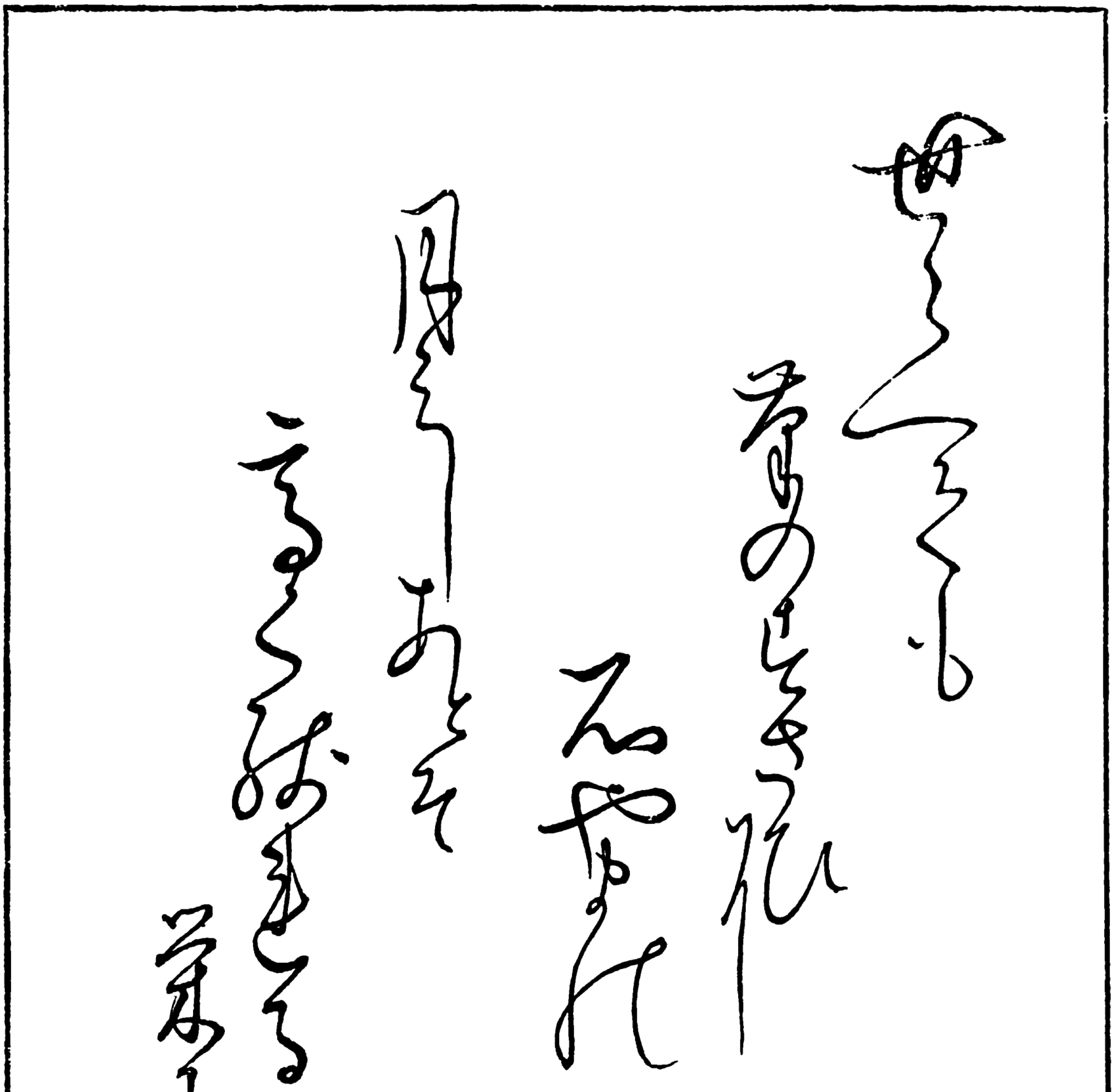
該名於去明治二十八年六月初七日當我官兵進入北門門扉緊鎖之時汝陳法敢冒敵陣携楷梯來助力攻打本師團長深嘉汝以一婦身有此美事其効可賞玆賜銀五圓賞其美併奬衆庶後日報効無悞

明治二十八年七月五日

近衛師團長　能　久　親　王

といふ記事ありたり。吾人は、殊に臺灣の忠良婦人の率先者として、此處に掲げ、臺灣全土の婦人女子の、一日も早く、此の率先者に從はむ事を待つ者なり。

●課題出詠の君だちに　一言まゐらすべきことあり。さるはこたびにかぎらず。いつも少くて十首、多くて、二十首が程は期にれくれて、郵便のつくが常のやうなり。かくては限なくめでたくものせられつるをも、惜しくもすてんより術なし。これ限なく口惜しく覺ゆるなり。心し玉ひてよ。



鍋島侯爵夫人榮子染筆

敎の庭

八月廿日兼題　女郎花

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　日本橋區堀江町二丁目十番地　曲澤ひて子

さろふともなひきなふしろ女郎花
　わたしこゝろの秋の野かせに

地　福岡縣早良郡西新町　樋口けふ子

風のみか露にもなひくをみなへし
　こゝろひとつを誰によすらん

人　河内國讃良郡住道村　甑受之げ子

吹風にれもひみたれてひとかたに
　なひきもはてぬをみなへし哉

手をりなは袖やぬるらんさ思ふ迄
　露おきあまるをみなへしかな　　住山識子

朝露にひもさく野へのをみなへし
　うつろふ色にそてぬらすらん　　安井翠子

あたしのゝ風に靡きてをみなへし
　うしろめたくもひさり立かな　　磯部つや子

物いはゝ言さはましををみなへし
　なさ口なしのいろにさくらん　　山田かく子

秋の野によそほひ立るをみなへし
　はなのすかたのなつかしき哉　　山内照子

女郎花にほふさかりはおきろはる
　つゆも色あるこゝちこそすれ　　畠山千代子

あたにのみ靡くは風のうき名さも
　いはれの小野のをみなへし哉　　畠山ゆき子

七草のなにはあれさもをみなへし
　ゑにうつしてもなつかしき哉　　木村ちよ子

秋の野の色は千くさに見ゆれさも
　こゝろのさまるをみなへし哉　　木村八重子

秋の野の千くさの中のをみなへし
　いはぬ色こそゆかしかりけれ　　丸山須磨子

あきの野にひさりなたちそ女郎花
　うしろめたしさ人そいふなる　　鈴木美惠子

露にふし風にもなひくをみなへし
　花のこゝろをたれかしるらん　　牧野さち子

あき霧に立かくれてそをみなへし
　ゆかしさ人の見ろへかりける　　牧野楢子

をみなへしこゝろ二はなきものを
たゝなる者と誰かいひにけん　進藤かれ子

秋の野の千くさの中にさきいてゝ
いはぬ色なるをみなへしかな　進藤もと子

よそほへる花のすかたにおく露も
なまめくのへのをみなへし哉　永井さい子

露にふし風になひきてをみなへし
たかためにほふ秋のしのはら　小野田のふ子

草深きなつ野のすゑにをみなへし
さきて秋まつさまそ見えける　山本いと子

夕露をたまにかさりてをみなへし
立るすかたに似るものそなき　吾妻ちか子

なつかしきあしたのはらの女郎花
なひくもあはれあきのゆふ風　伊賀直子

おくつゆに色香勝れるをみなへし
手折るもをしき心地こそすれ　大谷津琴子

あきまたき見れはなれふす女郎花
露にやむすふなかきちきりを　舘脇ます子

秋風のはれゆくのへのをみなへし
つゆに匂へるさまあはれなり　諸井節子

女郎花たをらまほしくきてみれは
おのかものとやむすふ夕つゆ　杉浦いさ子

人もみぬ野邊に咲たるをみなへし
あかぬ色香の情しくもある哉　池谷蘭子

朝いには露になまめきゆふへには
風におもれるをみなへしかな　佐々有鄰子

あたなをはたれに寄すらん女郎花
あきの野風にうちなひきつゝ　松原保子

なまめきてたてるすかたを夕霧に
たちかくさるゝをみなへし哉　大津千枝子

とふ人もなき秋の野のをみなへし
露をかさしてひとりたつかな　大津鉦子

秋風にふかれてふせるをみなへし
花のすかたのしほらしきかな　碓井たけ子

なにし負あたしの野へに咲とても
あたなゝ立そ野のをみなへし　碓井わか子

おくつゆはふく秋風にみたるれと
なひきもあへぬをみなへし哉　碓井信子

白露にいろましかほのをみなへし
風になひきてたれにみすらん　新開みちを子

くちなしの岩手の森のをみなへし
いはてゆふへは誰まれくらん　楠稍子

人毎に折らるゝものををみなへし
まことの色をたれにみすらん　島田好子

雨風にゑなるゝのへのをみなへし
　おきそふ露はなみたなるらん　木村緣子

數多くはなはさけともをみなへし
　名さへ色さへなつかしきかな　水島郞子

女郎花さくあきのゝにやさしからん
　つゆのぬれ衣身にはきるとも　野田千代子

をみなへし花のさかりに露おひて
　たふるゝさまは哀れなりけり　中島ふさ子

なつかしきあきのさかりを女郎花
　たか爲にかはやつれふすらん　荒井清子

ちきりけん夕つゆ結ふをみなへし
　よな〳〵月のかけやとしつゝ　芝田源子

けさみれはつゆの玉衣きかさりて
　いとゝもゆかしきをみなへし哉　松原つれ子

秋風になひくまに〳〵ひもときて
　あためく色のをみなへしかな　浦島龜子

あきの野になまめきたてる女郎花
　はにおく露のかはくまそなき　長島綏子

たれみよとよそほひぬらん女郎花
　色あるつやをたまさかさりて　根岸純子

女郎花はなのゑたひもうちときて
　たれさゝもにか野へに咲らん　成田波子

野分せは花やしをれんをみなへし
　けふの盛りをあくまてもみん　遠藤花子

秋の野に花のゑたひもときそめて
　なまめきさけるをみなへし哉　近藤錦子

むつましくつゆもやとれる女郎花
　あたなる風やふきみたすらん　澤田俊子

あきの野のつゆにおきふす女郎花
　あたなる色もなつかしく見ゆ　溝口なほ子

すみわひて世をゝるかの野の奥深く
　さけるをみなへし誰誘ふらん　溝口信子

おきそはるつゆもいつしか女郎花
　あたなるまてにたれ招くらん　溝口寛子

亂れふすあしたの原のをみなへし
　たかおきふしの露のなこりそ　岡田波子

ふすもありなひくもあれは女郎花
　あためく名をは人のたてけん　神田樂子

わきもこか庭のはひりにさき出て
　ゆかしく立るをみなへしかな　神田謙子

そよ〳〵とふく秋風にをみなへし
　靡くすかたにあかれさりけり　小川金子

の分せは花やみたれんをみなへし
　宮きの野邊にさきしあまれは　小川富子

おきのゝに人まち顔のをみなへし
　ゆふへの風になひきそめけり　長島諒子

すかたこそ風には靡けをみなへし
　もとのこゝろは動かさらまし　梶井久子

たをやめのすかたにまけり女郎花
　おく露さへもたへぬはかりに　加納嘉子

よそほしくつゆをかさせる女郎花
　誰にちきりてのへにさくらん　河野文子

手にとらはつゆやこほれん女郎花
　匂ふさかりのはなのすかたを　山形ます子

もゝ千くさわけて手折らん女郎花
　おく白つゆにそてはぬるとも　近山まつ子

八千草の志けきか中にをみなへし
　名さへ色さへなつかしきかな　名取正代子

朝ことにいくたひ露のおきかへて
　なまめく野へのをみなへし哉　河田いし子

風ふけと竹のまかきをたよりつゝ
　つゆにもふさぬをみなへし哉　羽田三緒子

秋きりに立かくるともをみなへし
　なまめく色はなほしるきかな　廣瀬きく子

行先をいそくたひ人もをみなへし
　さけるのへには立とまりけり　廣瀬うめ子

つゆにふし風になひきていつ方も
　ひとつに匂ふをみなへしかな　井出信子

さき出て匂ひこほるゝをみなへし
　いつちの風になひきふすらん　徳永ます子

いろも香もうらなつかしき女郎花
　こゝろのおくのたとらるゝ哉　市川柳子

夕露にうち志をれたるをみなへし
　ふくあき風をうらみかほなる　曲澤秋香子

靡かぬはあらしとそおもふ女郎花
　おのかさま〴〵咲はいつれと　平野きみ子

秋の野の千草にましるをみなへし
　志たりかほなる色そをかしき　坂本乙子

秋もまた浅ちかはらにさきにほふ
　すかたやさしきをみなへし哉　諏訪晴子

かつみてもいろうつくしき女郎花
　おく白つゆになほよそふなり　宇野勤子

秋の夜の月にもはなのいろみゐて
　すかたつゆけきをみなへし哉　宇野富子

こゝろなくふきくるかせに女郎花
　なひきなふしそ香は匂ふとも　竹野竹果子

玉かつらよろほひ立るさまみゐて
　つゆもみたれぬをみなへし哉　柿木鋼子

あたなはかせやたてけん女郎花
　ふしつなひきつ野へに匂へは　吉田芳子

たかためにとりよそふらん女郎花
　おく志ら露をたまさかさして　永井夏子

みる人もなき山さとのをみなへし
　ひとりなまめくさまあはれ也　矢野高子

つゆ深きあきの夕野を分けゆけは
　あはれになひくをみなへし哉　野中あき子

つゆにふしかせになひきて女郎花
　匂ひゆかしきはなにもある哉　久松せい子

女郎花さきのさかりとなりぬらん
　のへゆく人のすきかてに見ゆ　三原照子

あたといふなやいさふらん女郎花
　かくれの小野にひとり立るは　齋藤つや子

なまめくとおもひしのへのをみなへし
　なとこさひしく世と成にけり　師岡千代子

朝夕のことなるかせになひきつゝ
　あはれに見ゆるをみなへし哉　竹村こと子

咲いてゝ今をさかりのをみなへし
　いはぬ色にそ野にはみちたれ　清水きよ子

虫の音にあはれさまさる秋の野な
　なくさめ顔にさくをみなへし　小野崎さみ子

秋の野にさき匂ひつゝをみなへし
　千草のいろにまさるいろかな　松下よし子

山里のものとしもなしをみなへし
　いろめき立るはなのすかたは　林光子

とりどりの花の中にも名において
　色なつかしきをみなへしかな　林久子

秋かせに何おもふらんをみなへし
　露けきのへにひとりたちつゝ　香川穎子

秋の野にさき亂れたるをみなへし
　ゆふへの風にたれまねくらん　中原貞子

秋の野の露にをれふすをみなへし
　つまとふ鹿もれたしとやみん　彦坂葦子

朝夕にこゝろつくしゝ甲斐ありて
　けささきそめしをみなへし哉　御代中子

さらぬたにうしろめたきを女郎花
　なとこ川にはなさきにけん　田中麟子

秋風のつよきこゝろはしりなから
　なほうちなひくをみなへし哉　久保田りつ子

つゆふかきさかのにさける女郎花
　月にとひくるひとやまつらん　青木春子

白露のたまをかさしてをみなへし
　なまめき立てる秋の野へかな　中村芳尾子

山里のくさのまがきもあきされは　匂ひゆかしきをみなへしさく　岩崎今子

秋風になびくすがたのあためきて　匂ひこぼるゝをみなへしかな　鎌形素子

露しげきあたの大野のをみなへし　一枝手をらんそてはぬるとも　大海原芳子

女郎花あきのゝつゆにうちなびき　さきたる花のいろそあたなる　高井孟子

さがの野の野すゑのつゆに女郎花　ぬれてそ花のいろ香まされる　古市錢舞子

あたの名はよしたてすとも女郎花　なまめく色はつゆに見えけり　河村土子

のに原にさけるすがたも艶めきて　ながめそへたるをみなへし哉　花山保江子

秋の夜の月のかつらをまねくらん　露になびける野のをみなへし　花山操子

奈なれつ　野末に立るをみなへし　たが爲にかはものおもふらん　雄久保道子

八月廿日兼題　夏期休業の感

地　大阪市北區相生町百六十二番邸　梶井久子

なれし海山をあとに見て遠くものまなびに出でし身は夏ごとにたまはるいとまこゝろいみじう齢をのぶるものなれかしひころこひしうなつかしう思ひわたりし父母の御ひざもとに立歸りてわりし事ども何くれと物がたりあるはこゝかしこに誘はれて海に山に心をやりあるはふるき友どちを訪ひもしとはれもしてつもる思ひを語りあふなどひとつとしてたのしきわざにあらざるはなしろも〳〵斯る草ふかき片ゐなかにうまれし身もひとなみなみにたちいでて足らはぬ事なき敎をうくるだにうれしきに此のごろの暑さにもなれぬ所せき學の窓にては病もやいでこんとかく暇をさへ賜はりてれのがまにまに心をやらさせらるゝもいたらぬくまなき御世の惠にあらざらんやはされどかくいとまたまはりてかくあそびありくうちにも衛生の道をつゆわするゝことなくもはら心を用ひ又業を始めらるゝ日までにはさきにまさりて身をすこやかになしおくべきことにこそ

八

長野縣長野町八百四番ノ内一　吉田芳子

一年一度の長き休はきたりて同じ學びの窓のさち多き孃君等は箱根に暑をさけ日光に涼を納れ大磯に浴みするなどおのがむき〳〵心のまゝに旅立ちせられぬものゝ足らぬ妾はかゝる樂しみも得難くいぶせき藁屋にこもりて一日二日をすごしけりさて兄君の都へ物し給ひしより此方三とせむかりは書爆らしゝ事なけれむ徒然なるまゝ書棚のおくより文箱の底までこと〴〵く取り出しゝに未だ見もきゝもせざりし和漢洋の書どもさま〴〵ありたりろが中にも皇國の文もて記せる歴史傳記小説紀行さては物語りなどいと多しかゝるめでたき文どものあるをも知らで朝夕敎への庭の草をつむにせはしく打捨てれきたる事のうたてさよと此日よりひたすらこの文の林に分け入りて讀みつ評しつ日をつみ夜をかさぬる中にわるは見ぬ世の友が文の爭ひに暑を忘れわるは雪路になやみし翁と語りては我身も肌さむくわるは扁舟に掉さして夏月を碎きし友と交りては妾が袖にも涼しき風の通へる心地して長き休暇もいつしかすぎはや二三日をあますのみに至りぬおもひめぐらせむ居ながらにして旅せし如く友なくして物語らひし心地しけりわはれこのよき友と四方山の話に涼をむかへ昔語りに暑を忘れしころこよなき避暑の料なりしか

名取正代子

學の庭もきのふにて終をつけ暑中の休暇とはなりぬ　去年の夏は避暑の爲箱根にものしつれど　今年はいづこよけんかしこよけんと打案ずれど　又つら〳〵おもひかへせば老の身いたつきの身ならんにはともかくも　今を盛りの年してここに儘なるものゝいかでかはかりのあつさをいとふべき　さりとていぶせき住居にものせんも何となう心ちおちゐすして　文などもよみゐず且かへりて身を害ふ歟もあらん　を近きあたりによき處もがなと　おもふ折しも同じ心の友垣より近々に避暑の爲中戸摩の　郡なる　御嶽にものせんとおもふを　いかになさるゝのかされぬ　此あたりはいともの靜にて氣候も殊に涼しく　道の程も遠からねは　おのれもいざうれしくて直にまゐるべきよしいらへぬ　さてあくる朝またき　よりはらからともをも打つれいてゆきぬや〻市中を離るれば　かしこにこゝに瑞枝さし茂りて　涼しきかせは袂にかよひいとこゝちよし

やがて和田峠の麓に至り　これより九折の　坂路にかゝるつれ／＼ならはぬ路とて皆足をひき／＼　行く中にも　幼き妹子なとをは手をひきて上らしむるを友の一人は　打笑ひて足引は山路の　事とおもひしに　けふは手をさへ引かれてそ行くなとゝのゝしるも又をかし　なほゆき／＼てやう／＼一の小さき村里にいてぬ　松杉の叢を淩きて高く立てるか中に　殿宇大きうひろやかに神鏡きらめきわたりて見ゆるは　これなん金櫻神社なりける　拜し終りてしはしかたへにいこふに　實に聞しに違はす夏なきところやとおもふはかり涼し　さてよき程のところにやとり定めて　飯なと喫し其日はくれぬあくる日よりは　日毎に里計りの道を　往來しつゝ行手／＼に立ましる草木金石の類をあかすあつめ　ひろはんとて　深山路をたとる／＼ゆくに實にくさ／＼のものともの今　まて　見なれぬか多かります／＼興に入りて　けふは忘川のほとり　あすは仙ヶ瀬昇仙橋の邊又の日は雪江瀑　覺圓峯なとの奇景を　つき／＼見もてゆき或るは幾重もの瀧かれに　松の木ともをかしく立てるも實に高砂すみの江にもまさりて見ゆ　なほ石川のあたりに至れは實に仙境にも入りし心地せられ魂もうははれ　氣も狂ふはかりにて　此世にありとしもおほえす　かく日毎にかしこにこゝに　そそろあるきするほとに　いふせかりつる心のちりさへはらひやられいとすか／＼しうてひと日／＼と　すきゆく程に　はや三十日あまりになりて又もや學の庭にかへるへき折い來りけれは　今まて　取ちらしたる草木金石の類　又文なと取かたつけ　夏しらぬところをは立つ秋風におくられてやかて家にはかへりけり

河田いし子

此頃は夏の休とて心あひし友とちのたれかれ　皆つれ給ひてたへかたきあつさを　いかほ箱根の出湯大磯かまくらなとの　海とおもひ／＼に父母君あるは兄姉君につれられゆけは　わらはにも　ともにゆきてんやと誘ひたまへは　母君にうかゝひてあす　かへりこときこえあけなんとちきりわかれつれと　ひとりつく／＼思ひみるに學の道終りたらん後は　海に遊ふも出湯によくするも　たのしからんされといまた學のなかはの　身なれは　朝おきいつるより學校にいてなんことのみ心にうかへと　休みなれは　せんかたなくいま頃は何々の時間と　心にたゆるまなくおもへと　きまりなけれは何となうものたらぬ　こゝちせられて　つとむることのなきはくるしきものなり　さりとて遊ひにゆくも心にそまねは　さそひ給ひし友とちへはよきほとに　かへりことしてゆかす　まなひのなかはの身はやすみはよろこはしからす日毎に　學校にいてゝ　いそしみつとめまなふこそたのしくてよけれ

佐々有鄰子

あら金も眞金もとらかすといふなる夏の日は　毎日かよひなれしわか學校も教師の君をはしめ　妾かしたしきとも人もみなとりとりにあた海に浴し　はこねに暑をさくるものから　心つくしのはてよりはる／＼都の空の學窓に　力をつくし心をねりし人等は古さとさして歸省するものそ多かりける　その一人の妾なれは　こそ今

日は新はしさかいへるさころより 鐵道にものして西國さして立出ぬトンチルをあまたはしりすき川さいひ山さいひ 湖水のほさりをもすき都七條の停車塲につき今度の遷都紀念の 大内裏の小形の平安宮をふしをかみ 内國博覧會場にも立よれは みるものきくものみな目を驚かし 耳を新しくせぬはなかりけり 山かたまける父母の土産にさ 會場のさまをつはらに記したる冊子を あかなひねてもさ來し道より 神戸をすき 廣島にいてて滊船にのりうつり 筑紫の山さゝにかへり來て 家族親族をはしめかぞいろの尊顔を拜みて 御代の惠のあつふすまならぬ大君の 大御心すすしの衣をさりよそへるも 陸海のけはしき道をいさやすく 越來しもわか天皇のたまもののみならす 父母の慈愛の心をも ふかく感してかやり火のかけに都の方をなかめやりかくはしるしぬ

田中りん子

世の人情程うつりやすき物はなし 薄衣さへ身にまつひ かねる暑さの比は 火桶なさは見るもうたてくて 庭の木立にそよける風に音きくさへこゝちよく流るゝ水にむかへば むすはぬさきにすゝしきていみしきあつさの比は 人の身も力薄く 手足もたゆくおほゆるやう成れは いそしき業も何さのう ものうければ夏の期は身をやしなふころよからめ 國の爲家の爲 父母夫の爲に盡すことも我身弱壯になくてなにかせん かゝる暑さの 最中は業もやすみて身を安らけき所におくへくなん



九月兼題

五日
歌……月夜琴聲
文……秋草を見る記

廿日
歌……祇王
文……秋懷のことを



避暑の栞（承前）

磯部　温泉

上野より滊車にて直に達す（九十八錢）〇温泉宿は共壽舘、鳳來舘、對岡樓などよろし

妙義山

磯部より西へ二里〇旅舍は神戸屋菱をよしとす

霧積　温泉

碓氷峠の中腹にあり、横川停車場（上野より一圓八錢）北へ二里〇温泉宿は長生舘、錦風閣、濱香閣などよし

輕井澤　温泉

碓氷峠を上りつめし處なり、上野より汽車賃一圓十八錢〇旅舍は龜屋、萬松軒などよし

淺間　温泉

信州筑摩郡にあり、直江津鐵道の上田停車場より十二里餘〇湯口、御殿の湯、日の湯など六十ヶ所、温泉宿六十餘あり

赤倉　温泉

越後中頸城郡字一本木にあり、直江津鐵道の出口停車場より一里餘、東京より七十三里なり〇温泉宿は香擻樓、村越屋、高田屋などよし

日光　名所

日光を見ざれば結構を謡るべからず、日光の美觀世界に双なき事豈唯に以太利のチーブル府の比ならんや〇上野發一番滊車に行けば一日にて遊覽し終り歸るを得べし（汽車賃一圓八錢）東照宮は日光山の麓日光町のはづれにあり、〇朱塗の橋〇石の大鳥居〇陽明門また日暮御門といふ〇唐木御門〇拜殿〇東照宮〇大猷廟〇甚五郞作れむり猫〇華嚴瀧〇霧降瀧〇裏見瀧〇中禪寺〇案内料三十二錢五厘、普通案内料十二錢五厘〇旅舘は小西屋、神山など宜し

那須　温泉

野州那須郡湯村にあり、黒磯停車場にて下車するを宜しとす（上野より汽車賃一圓五錢）〇温泉宿は小松屋はじめ數軒あり

鹽原　温泉

那須停車場（上野より一圓二錢）を去る西北六里鹽谷郡の北端鹽原山の麓にあり、急流一帶その間を奔り激端岩を嚙むで飛沫を吐く兩岸の岩石は削るが如く景色の幽邃實にこの地を踏む者をして仙境に入るの思あらしむ　高雄塚〇化石〇温泉場は上中下鹽原及湯本鹽原の四ヶ村に散在す〇宿は富田屋、松本屋、山口屋、楓川樓などよし

飯坂　温泉

岩代國伊達郡にあり、福島停車場（上野より一圓六十五錢より三里（人車賃二十錢）〇日本一の奇妙なる釣橋あり〇温泉宿は花水舘、實里井、升屋よし

鹽釜　名所

仙臺停車場より汽車賃十一錢〇鹽釜神社、國幣中社にて奥州一の宮なり、祭神は、武甕槌命、經津主命、鹽土翁、林子平の作、

日時計、和泉三郎忠衡献納の南蠻鐵の燈籠○塩土翁の鹽燒きしさいふ鹽釜あり○旅舍は海老屋、勝畫樓などよろし

みちのく歌

みちのくのはいづくはあれど鹽釜の
浦こぐ船のつなでかなしも

松島（まつしま）　名所

鹽釜より舟を雇うて行く（舟賃十錢）○我國三景の一なれば風景の絶佳なるは今更いふを待たず、雄島、福浦島、宮戸島、五太島に渡せるすかし橋、いづれを見ても奇觀なり○富山、扇谷より全景を見わたせば八百八島いづれも松ならぬはなく、松島やあゝ松島やの歎賞實に空しからず○瑞巖寺は臨濟宗の寺院にて伊達政宗の廟所なり、開山は雲居國師俗名眞壁平四郎、政宗の木像、政宗朝鮮よりの分捕品○松島館は東北紳士の倶樂部○觀瀾亭は伊達家の所有なれど望むに任せて宿泊を許るす

菖蒲田濱（しやうぶたのはま）　海水浴

鹽釜より陸行三里（人車賃二十八錢）舟行ならば一時間○旅館は大東館よろし、樓上より竿を投せば巨口細鱗潑剌さして上る實に大ぼらなり

中尊寺（ちうそんじ）　名所

陸中西磐井郡にあり、この寺一の關停車場を距る二里、奧州街道にて車の便あり、又松島遊覽の序に二時間を費さば同停車場より一の關に達すべし○衣川○櫻川○判官館○達谷窟○玉串驛など風景もよく古蹟も多し

偕樂園（かいらくえん）　公園

亦の名を常磐公園さいふ水戸の上市にあり、源烈公の創められし所にて前に仙波の湖水を控へて前山の翠をうつし風光絶佳なり○園内梅樹數千株あり、老木參差さして枝をまじへ、亦喬木の鬱蒼さして天を摩するあり○好文亭、烈公の退隱所なりき、三層の樓にし結構壯大にして雅致あり、烈公の遺物多し、額字銘てになは烈公手づから書つけられし板戸あり○偕樂園碑○常磐神社、別格官幣社にて源光圀昭公源齊昭公を合祀す○上野より汽車賃一圓、水戸停車場より公園まで車賃十錢○旅舍は上市の森川屋などよろし

大洗（おほあらひ）　海水浴

水戸より四里、人車賃二十五錢、船にて那珂川を下れば七錢これも亦面白し○大洗神社、國幣中社にて祭神は大名持命、少那彦命なり、この大神たちの御魂海外漫遊の歸途立寄りたまひてそのまゝ鎭まりましませし由は文德實錄にくはし○社地海を拔て高く聳ゆ樹木森々さして繁る、その樣石階高さまで東京芝愛宕山に髣髴たり○石階の下海濱一帶岩石峨々さして屹立し、波濤天外萬里の外なる北亞米利加より大平洋を捲いて來つて岩石に激して怒號し飛沫泡雪を散らす、その壯觀、覺えず人をして快哉を呼ばしむ實に天下の絶景なり、大磯江の島の勝もこゝに來りて語るに足らず○婦人小兒には磯かけの濵靜なる處あり以て浴すべし○亦海岸に直下二丈許の滑引の瀧あり滔々さして落ち來り流て海に入る、海水に浴する者出でゝ直に來りて瀧にうたれなば鹽氣の滋潤をさり身體淸潔にす、精神壯快なるこさいふばかりなし亦この便利ある處天下亦他になし○旅舍は魚來庵　錦波樓　中村屋など皆海岸に家を構へて眺望よし　朝暾玉兎のさし昇るさまは亦格別のながめなり

（をはり）

大膳大夫道親王

新しき年の始に思ふどちいむれて居れば樂しくもあるか

思ふどちとは、思ふ同士にて、心のあへる朋友なり。○いむれては、いは添へたる辭にて、唯多く集り群れてなり。○あるかのかは、感歎の辭にて、かなと云ふに同じ、○一首の意は、新年の始は、何となく樂しき心地するに、我が思ふ同士、即平生より能く心のあひて、親しく交際する朋友と、同じ處に此の如く打ち群れて、種々の面白きことなど遊びて居れど、實に樂しく嬉しきことなりとなり。

朋友は、異姓の兄弟姉妹とも云ひて、唯同じ父母の遺體こそ受けね。眞實の兄弟姉妹にも變らぬものなり。故に、朋友は、兄弟姉妹に次ぎて、終身の相談相手なり。されど、其の交際の如きも、兄弟姉妹に變らぬ樣にせざるべからず。凡、人は萬能の智を備ふるものに非ざれど、欠點なきこと能はず。又過失なきことも得ざるものなり。其の欠點を補ひ、其の過失を償ふものは、實に朋友なり。而して、己の欠點過失は見えざれども、人の體能く見ゆるものなれど、朋友ありて、之を切磋琢磨せざれど、完全なる人とはなりがたし。此の如く、朋友は、尤も大切な

るものなれば、其の朋友によりては、善くもなり、惡しくもなるものなり。されば朋友を撰びて、交際すること、尤も必要なりとす。又同氣相求め、同類相集るとも云へば、人の善惡如何は、大方其の朋友によりて知らるゝ、朱に交れば赤くなるは人の免れざる所なり。注意の上にも、注意を加ふべきは、此の朋友の撰擇にころありけれ。さて朋友と交るには、信義を以てせざるべからず。互に欺き僞ることなく、約を結びて違ふることなく、過あれば徐に之を諫め、己の智の及ばざる時は、之を議り、又諫を受けたる時は、謹みて之を納れ、議らるゝ時は、心慮を盡くし、腹心を開きて、少しも包藏することなく、歡あれば、之を祝ひて共に樂しみ、難あれば之を助けて、共に苦しみ、相扶け相携へて、以て身を終るまで變るべからず。すべて樂しき時、共に樂しむは易き事なれども、苦しき時に共に苦しむは難きものなり。然れども、此の苦樂を共にする事能はざるものは、眞の朋友には非ず。所謂利を以て交りたるものなれば、終身事を共にするを得ざるのみならず、互の爲に益となる事なし。世に始は膠の如く漆の如きも、後には水火の如く、呉越の如くなるもの往々あり。朋友の交謹まざるべからず。

死にも生きも同じ心と結びてし友やたがはむ吾もよりなむ

讀人知らず

一首の意は、朋友と始めて交を結ぶ時に、互に心の底を打ち開きて、死生を共にせむとまで、契を結びたり。されど、假令如何樣なる事ありても、朋友の方より吾に違ふ事のあらんや。又我よりも朋友に背くことなく、常に心を寄せて、共に世に處すべきとなり。

已に陳べたる如く、朋友は、何事も打ち開けて、相談すべきものなれど、始に交際を結ぶ時が第一なり。若し惡しき人と交を結びたらんには、後に至りて、如何なる憂苦にあはんも計るべからず。既に撰擇に撰擇を加へて、此の人はと思ひ定め、彌朋友の契を結ぶ時には、死生も共にする覺悟なかるべからず。百年の身も、朋友の爲には惜まざる決心あるべきなり。而して、互の心に、さる覺悟を極め、契約をなしたる以上は、決して違背すべからず。苦樂相共に、死生相同じくして、相扶け相補ひて。以て事を成さむ、何事か成らざらむ。此の歌の友やたがはむ吾もよりなんの二句を、肝銘して忘れずむ、永く朋友の交を遂げ、歡樂を受くべきな

り。

讀人知らず

なにせむにたがひは居らむ否もうも友のなみ〳〵吾もよりなむ

否もうもとは、否と云ふことも、諾と云ふこともなり、〇一首の意は、己に苦樂を共にし、死生を同じくせむと契約せし朋友は、如何がして、違ひさかひて居るべき、唯否と云ふことも、諾と云ふことも、朋友のする通に、吾も同意して、何事も共にすべしとなり。

凡一事をなさむと欲する時、之を朋友に計るに、各其の心々になりて、諾否を云ひ出でたらんには、決して、其の結末の着くものに非ず。討論研究はせざるべからざるも、一方は是非左にせむと云ひ、一方は必右にせむと云はゞ、其の結果、必爭論となりて、圓滑に事を成就すること能はざるべし。すべて、物事は爭ふ時は破るゝこと多くして、成る事少し。故に議論をするにも、爭ふ心を持たずして、相談する心にてなさば、必成就すべきなり。事は成就を以て第一とす、一時の諾否何かあらむ。されば、諾否は朋友のまに〳〵如何にとも從ひれきて、互に心を開

樞密院副議長伯爵東久世通禧君序
樞密院顧問官
華族女學校長　細川潤次郎君序

前文科大學教授內藤耻叟校閲
生田目經德著

大日本歷史地圖

全壹帙三十葉、每圖々說ヲ詳記ス、彩色鮮明石版印刷每圖幅、縱壹尺七寸餘、幅壹尺三寸餘、洋紙美濃裏打壹部定價金參圓、壹葉定價金拾錢、豫約二千部限リ、諸官衙及ヒ公立學校ハ御註文到達ノ月日ヲ証トス、一時ニ二十部以上ノ御註文ハ、定價又ハ豫約ノ五分引ケ、一時四十部以上ノ御註文ハ、全一割引ケ、尙豫約御申込諸君ノ御便利ヲ慮リ左ノ價ヲ以テ豫約ニ應ス

本年八月中一時入金ノ御方ハ　金壹圓六拾錢
本年九月中一時入金ノ御方ハ　金壹圓七拾錢
本年十月中一時入金ノ御方ハ　金壹圓八拾錢
本月十一月中出來之事
但見本御入用ノ御方々ハ郵券拾錢ヲ副ヘ申越サル可シ●府外ハ小包郵便税若クハ運送費申受候事

（目錄）　總論　神武天皇東征一景行天皇東西鎮撫二成務天皇朝國造封置三歷朝封置國造四欽明天皇朝西蕃五天智天皇朝分國六寧樂朝分國七畿內七道六十六國八中世豪族所在九鎌倉幕府守護配置一〇北條氏執權時代一一南北朝一二南北兩朝盛衰一三應仁大亂一四室町將軍家分爭一五群雄割據一六室町武營末世一七群傑爭境一八織田氏盛時一九豐臣秀吉遠征二〇關原分爭二一德川氏諸侯封地（還國奉行郡代及附所）二二全上二三全上二四全上二五全上二六府縣分轄二七全上二八征淸軍編成二九版圖及地方分割三〇

此地圖は我が國太古より現今に至る歷史の變遷沿革を現し彩色を以て各時代の形勢盛衰の狀況を一目に瞭然ならしむ、古來著書多けれども歷史地圖に至りては檜山氏の武家沿革圖あるのみ、蓋し歷史の古今を通じたるは此圖を以て始とす、著者數百部の書を引用し數年の苦心考究に由りて成る、實に近代の大著作にして史學を益すること頗大なり、世の讀史者又は諸學校にて國史を敎ふるもの一日も缺くべからざる須要の地圖なり、詳に古今成敗の跡を示せる萬卷の史籍を閲するも此の一圖に如かず、冀くは史學に志す諸賢必座側に備へられよ

豫約申込所　發行所　東京神田區淡路町貳丁目四番地　地圖專門諸版印刷彫刻所　清華堂　大川通久　郵便爲替振込ハ神田區淡路町郵便局宛

仝　上　東京神田區表神保町貳番地　中央堂　宮川保全　仝　上

仝　上　東京京橋區彌左衛門町七番地　合名會社　經濟雜誌社　郵便爲替振込ハ京橋區銀座郵便局宛

女鑑第九十一號目錄

女鑑 婦人の任務及其任務を完うすべき方法を明にす(完)
論說 女子文學の本色……大町桂月
女界一則……坂本三七郎
史談 高歸くに女の傳……鹽井ふく子
孝婦れん子……瀟風仙史
家政 いけ花(圖入)……井上賴文
いけ花(第二)……田邊わけ子
だいどころ
思ひいつるまゝ……くりや女
漫錄 救急藥餅 小山田與清◎完華の治不治 小山田與清◎香のきゝやう なにがし◎不忍池の蓮 ちわき◎久太郎後室の女訓 それがし◎花ふゞき(二十) 鹽井雨江◎可憐孃(三) 中尾紫夢
文林 詠新中元◎同◎前田利嗣◎佐々木高行◎永石德文◎菊池武日 遊宇野興道◎三輪藥方◎柳原愛子◎鍋島榮子◎前田朗子◎西野子◎小池道子◎松平健子◎山田稻子◎奥山照子 田中竹野
文聲灣の嶋人に示す詞 惜別……永石德文
雜報 兩陛下御製謠曲◎帝國教育大會の決議◎佐藤大佐さ小學生徒の問答◎前田正名氏の女子訓誡演說◎茨城縣高等女學校◎滋賀縣彥根町立高等女學校◎兵士婦人の軍隊厚遇を謝す◎明治十年後の傳染病◎孝婦◎貞女◎受賞者◎受賞者小林氏の文◎茶の湯さ生花◎佛國人生花を學ふ◎朝鮮女學生◎出頭の天氣◎第八同尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員檢定試驗問題(完)
前田朗子詠筆硯冊……
敎の庭 歌文數十首
附錄 避暑のしをり
口繪……永峯秀湖
挿畫……高橋松亭

社告

〇代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及遞送にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事 〇別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし 若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證券郵送料御送附の事 〇未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十八年八月十九日印刷
同 年八月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所(電話番號一九四六) 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日內務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可)